續短歌私鈔

齋藤茂吉著

東京
岩波書店發行

續短歌私鈔

齋藤茂吉著

續短歌私鈔

齋藤茂吉著

東京
岩波書店發行

續短歌私鈔
齋藤茂吉著

續短歌私鈔

齋藤茂吉著

齋藤茂吉著

アララギ叢書第五編

續短歌私鈔

東京
岩波書店藏版

齋藤茂吉著

アララギ叢書第五編

續短歌私鈔

東京　岩波書店藏版

序

この小冊子は、さきに白日社から藏版した、「短歌私鈔」の續きである。「短歌私鈔」を大正五年四月に藏版して、それを讀返してゐると、すこしづつ誤謬と慊らぬところが見つかる。そのうちまた先輩・友人諸氏からも指摘してもらつて、そこで其等を書きあつめて、「短歌私鈔」再版のとき增補しようと思つてゐたところが、書物などをあさつてゐるうちに、存外分量が多くなつて來たから分離して一冊にすることにした。元來この小冊子は予自身の要求から成つたものであつて、謂はば予の『備忘帳』である。べろべろと書流していつて書物の體裁を成さぬのはこれがためである。それでも、さきに「短歌私鈔」を讀まれた人々に、この小冊子をも合せて讀んでもらひたい希望をもつてゐる。この小冊子を成すにあたつて先輩・友人諸氏から恩蔭をかうむつたところは、その個處

個處に明記して感謝の意を表した。しまひに、「短歌索引」をつけたのは予のためになかなか便利である。「短歌私鈔」の巻首小言で、『いゝ氣持云々』といつたのは單に、『うつとりする』の謂ではない。優れた藝術にむかふと、心はゆらぐ、次いで寂しさを覺える、時たつて心の充ち來るを感ずる。充ちきたる心をかへりみる快さを、『いゝ氣持』云々といつたのである。この「續短歌私鈔」に正岡子規の實朝評をもつと抄出しなかつたのは少し物足らぬ。大正五年の予の業餘の時間は多くこの「續短歌私鈔」のために費されたかの觀がある。それをみづから悔いない。大正六年一月十日。齋藤茂吉。

○續短歌私鈔目次

○金槐集私鈔補遺……（一）
○源實朝雜記補遺……（五〇）
○良寛和歌集私鈔補遺……（二五）
○良寛和尚雜記補遺……（二九）
○愚庵和尚の歌補遺……（三九）
○短歌第四・五句索引……（一四五）
○短歌第一・二句索引……（一六四）
○事項索引……（一八四）

金槐集私鈔補遺

金槐集私鈔補遺

○

『ふく風の涼しくもあるかおのづから山の蟬なきて秋は來にけり』（二十六頁）の、『山の蟬』を解して、『山の蟬は山に鳴いてゐる蟬で、里よりも山ではおそく鳴くから斯樣に言つたものであるが云々』などと云つたのは、此歌の題の『寒蟬鳴く』に對して極めて不徹底である。寒蟬は『かむぜみ』と俗に訓み、ツクツクホウシのことである。「箋注倭名類聚抄」には『寒螿九月十月中鳴甚悽急』とあり又、『此蟬青綠鳴聲幽抑俗人呼二之秋涼一者也是所レ謂久都久都保宇之也』ともある。寒蟬は寒蜩、寒螿などとも書き其ほか漢名にはいろいろある。俗には、ツクツクボウシ。クツクツホウシ。ツクシコヒシ、オーシン(イ)ツクツク。ツクシショウ。

などといふ。學名は、Cosmopsaltria opalifera. Wk.(Walker).である。參考書。古事類苑動物部。日本動物學彙報第二卷第六卷。松村松年氏日本千蟲圖譜第一卷。同氏日本昆蟲學。西村醉夢氏蟬の研究。和漢三才圖會等。

なぜ寒蟬の事を『山の蟬』と云つたかはよくは分からないが、恐らく「私鈔」て云つたやうな意味で詠んだのだかも知れない。「古事類苑」を讀むと、赤蜩(アカゼミ)の事を『サトゼミ』と云つてゐたり、馬蜩(ウマゼミ)の事を『ヤマゼミ』などと云つてゐて、一寸分かりにくい。併しむかしは今の動物學で論ずるやうに嚴格てなかつたのてあるから、大體の見當がつけばよいやうにおもふ。

此歌、貞享本には、詞書が、『蟬のなくをきて』となつてゐて、『寒蟬』のことが無い。又、歌の初句が『ふく風は』になつてゐる。予は『ふく風の』の方を取る。白居易の、驪山宮賦中に、『嫋々兮、秋風、山蟬鳴兮、宮樹紅』といふのがある。實朝は此詩句から暗指を得たのかも知れない。その他の歌にも漢詩からの影響

のあることを看過してはならない。このことを河西青五氏が言つて呉れた。

此歌と類想のもので、「續古今」に採錄された實朝の歌に、『今よりは涼しくなりぬ日ぐらしの鳴く山かげのあきのゆふ風』といふのがある。

○

寒蟬の事をしらべた序に一寸(チヨツト)ひとこと此處に書いて置く。かつて井上文雄の『秋またぬ籬(マガキ)の草の一本(ヒトモト)にうつくしよし蟬の鳴くなる』といふ歌を讀んだとき此蟬は、オウシンツクツクの事だとは思つたが、『うつくしよし』とは旨(ウマ)い事を云つたものてあると感心したのてあつた。ところが「古事類苑」をみると、『人人まうてきて哥よみけるに蟬をよめる。女郎花なまめきたてるすがたをやうつくしよしと蟬の鳴らん』(散木奇歌集卷二)(夫木和歌抄卷九。俊賴朝臣)といふ歌と、『屋のつまにつくつくぼうしのなくをきゝて。我宿のつまはねよくや思ふらんうつくしといふむしのなくなる』(夫木和歌抄卷九。俊賴朝臣)といふ歌のある事が分かつた。さうして、「物類稱呼」

には、『今按に俊頼朝臣、うつくしよしと蟬の鳴らんと詠じ給ひしはつくつくばうしにやあらん』とあることをも知つた。

○

「私鈔」中の歌には、『杜鵑』を『郭公』と書いたところが處々にある。これは從來の習慣に從つて其儘改めずに書いたのである。「萬葉集」には、保登等藝須、保等登伎須などのほかに、霍公鳥とも書いてある。すでに昔の博物學者が折々杜鵑と郭公とは違ふといふことを論じた事がある。今の動物學では、杜鵑科に、杜鵑（子規。蜀魂。不如歸。怨鳥。陽雀。時鳥。杜宇。など數多の書方あり）と郭公（くわつこう。かつぽう。かつこう。くゝさんこどり。たねまきどり等）と筒鳥（つつどり）と慈悲心鳥（じういち）の四つを入れてゐる。參考書。萬葉集品物解。古事類苑動物部。飯島魁氏保護鳥圖譜。内田清之助氏日本鳥類圖說など。

（附記）「物類稱呼」などには蚊母鳥はカツコウドリて、俗にカンコドリともいふとあるが、飯島氏の圖譜には蚊母鳥はヨタカだとしてある。このへんになると、書物によつてまちまちで、極めて雜然としてゐる。そこで、現今の分類による郭公は蚊母鳥、郭公鳥、閑古鳥であると思へば大體の見當がつくやうである。つまり、芭蕉の『うきわれを寂しがらせよ閑古鳥』の『閑古鳥』。越人の、『かつこ鳥板屋の背戸の一里塚』の『かつこ鳥』は現今の分類により杜鵑科のうちの郭公である。それから昔の歌集や「枕草紙」などの郭公は現今の分類による杜鵑であるといふことになる。このへんは先輩の教示をあふぎたいと思つてゐる。（三十六頁の郭鳥は郭公の誤植である）賀茂眞淵は、萬葉集中の呼子鳥は俗にいふ、「かつぽう鳥」であるといつてゐる（考）が、それは間違である。

○

『源實朝雜記』中の、『頼朝四十六歳政子三十六歳の時にお腹に宿つたのである』（百二十六頁）は四十五歳、三十五歳の誤である。それから、『細胞合體のあつたのは陰暦十月であるから』を『受胎は陰暦十月の末か、十一月のはじめと考へら

れるから』と改める。年齢の勘定を間違つたのは、實朝の生れた年を勘定したために一年餘計になつてしまつたのである。なほ、（百二十頁）の『それが未だ二十八歳の青年であつた』を『それが未だ三十歳にもならぬ青年であつた』と改む。

○

田安宗武の『二つなき富士の高ねのあやしかも甲斐にありとふ駿河にもありとふ』（十頁九、十二頁）は「續日本歌學全書」收のものに從つたのであるが、「和歌叢書」第六編「名家歌選」收なのものには、第四句が、『甲斐にもありとふ駿河にもありとふ』となつてゐる。○おなじく宗武の『ひむがしの山のもみぢ葉夕日にはいよいよ赤くいつくしきかも』（十頁）の『もみじ葉』は「名家歌選」の方には、『紅葉は』となつてゐる。これは『もみぢは』て『は』は第一格を表はす助辭の樣にも受取れる。さうすると歌の値打に相違を生ずる。予は『もみじ葉』の方が好きである。○なほ（百四十六頁）憶良の『憶良らは今はまからむ子泣くらむその子の母も我を

待たむぞ』の第四句第五句は訓方に異說があつて、『そも其の母も我を待つらむぞ』と云つたり、『その彼の母もわを待つらむぞ』と云つたりしてゐる。予のは一部は「類聚抄」に從ひ一部は賀茂眞淵の說に從つたのである。○（二十六頁）の萬葉卷三の歌、『苦しくも降りくる雨かみ輪の崎佐野のあたりに家もあらなくに』の『み輪の崎』を『神の崎』とし、『あたりに』を『わたりに』としてある書物もある。

○

（五十一頁）の『夕されば潮風さむし波間より見ゆる小島に雪はふりつゝ』の參考歌として、『波間より見ゆる小島の濱楸久しくなりぬ君にあはずて』（萬葉集卷十一）と『ゆふなぎにと渡る千鳥波間より見ゆるこじまの雲に消えぬる』（新古今集、後德大寺左大臣）の二つを書く。○（五十二頁）の『久かたのあま雲あへり』の歌の解の參考として『詠雪。はしたての（異本にぬばたまの）くらはし山に雲きらひ（異本に雲あひて）高市國原雪ふりにけり』（賀茂翁家集卷一冬）を書く。○（百十八頁）の『波姑射の山のかげとなりにき』の參考

として、『柚。陰高き高根の檜原そまたてとるや雲居の宮木なるらむ』（賀茂翁家集卷一雜）を書く。

○

（五十六頁）冬ごもりそれとも見えず三輪の山杉の葉白く雪の降れれば』の參考歌として、『我背子に見せんと思ひし梅の花それとも見えず雪のふれれば』（萬葉集卷八山部赤人）と、『梅の花それとも見えずふる雪のいちじろけむな間使やらば』（萬葉集卷の十）の二つを書く。なほ此歌の『冬ごもりそれとも見えず』を『冬ごもりしてゐる人の庵もあらうに、それがさだかには見えない』と釋いて置いたが、尾山篤二郎氏は、『冬ごもりを直ちに人の庵と解するはいかが。雪が降つたためにひどく綺麗であつて、これでは肅殺たる冬ごもりの景色とは見られないといふ意に非ざるや。この方妥當なりと信ず』と云つて呉れた。なほ、釋迢空氏は、此歌に『三輪の山それとも見えず冬ごもり』とやうに解く方がよからうと云つて呉れた。

○（七十四頁）の『山路ゆくらむ山人や誰』の參考歌は、元正天皇の『足引の山ゆきしかば山人の我に得しめし山包ぞこれ』（萬葉卷廿）に答へ奉つた舍人親王の歌である。なほ實朝の歌に、『み吉野の山に入りけむ山人となり見てしがな花にあくやと』といふのがある。實朝の『春雨にうちそぼちつゝ足引の山路ゆくらむ山人やたれ』の『山人』は實朝自身のことであらうと、古泉氏も尾山氏もいふ（百二十二頁）の「日本歌學全書」收のもの六百四十五首は六百六十五首の誤。此は柿崎洋一氏の指摘によつて改めたのである。なほ細別すると、春百十一首。夏三十八首。秋百十八首。冬七十八首。賀十八首。戀百四十一首。旅廿四首。雜百八首。神祇十五首。述懷四首。一本歌增補十二首である。（百二十四頁）從屬歌として五十四首ばかりは五十六首ばかりの誤。　○文章のまづい處は惜いても用語の下手なのがある。例へば、賞揚は稱揚の方がよく、唱導は唱道の方がよく、電車に引かれるは、電車に轢かれの方がよく、賞めるは褒めるの方がよいやうてあ

る。文献のところの加茂眞淵全集は賀茂眞淵全集の方が確かである。（百二十三頁）の眞淵が金槐集の歌に書込んだ文句』は『金槐集に書込んだ』とするか、『眞淵の金槐集欄外書』とする方がよい。（百〇二頁）八行の『あるかも知れない』は『あるのかも知れない』。（八十五頁）の『いづのお山は伊豆の御山で』の下に『伊豆と出づとに言掛けてゐる』と足す。（十一頁）の『宮路の人は宮中の人といふほどの意味』の前に『此歌の場合の』と入れる。（五十四頁）の『まきくも』は『まきもく』の誤植。（一三七頁）の越部禪師は越部禪尼の誤植である。

○

（二頁）の、『打靡き春さり來れば』の、『春』の枕詞としては、『打靡く』が普通だと云つたが、「冠辭考」の文を抄しておく。『打靡く（わがくろかみ。くさかの山。はるのやなぎ。はるさりくれば。）さて擧たるが如く、髮にも草木にも靡くものに冠らせ、また春とつゞけたるは、春は草木の若くなよゝかに靡くを云なり。いかにぞなれば、右の草香の山、柳

など續けしをはじめて、集中に春山のしなえさかえ。春されば乎々りに乎々り、花咲き乎々り。などよめるは皆若枝のとをゝに靡くをいへり。』○（八頁）の、『水たまる池の坡のさし柳このはる雨にもえいでにけり』のうちの枕詞、『みづたまる』の例歌として、『佛（ほとけ）つくる眞朱（まそほ）たらずば水たまる池田の朝臣（あそ）が鼻の上を穿（は）れ』（萬葉集卷十六）を書く。○（十二頁）の、『ながめつゝ思ふも悲し歸る雁ゆくらむ方の夕ぐれの空』の參考歌として、『みちのくにへまかりける人に餞し侍りけるに。君いなば月まつとてもながめやらむあづまの方の夕ぐれの空』（新古今西行）。『身にとまる思を荻の上葉にて此頃かなし夕ぐれの空』（新古今慈圓）などを書く。○（二十五頁）の、『五月雨の雲のかかれる卷向の檜原が峯に啼くほととぎす』について、『卷向は地名。檜原は檜の林のある意』と云つたが、次のやうに增訂する。卷向（纒向。卷目。卷牟久）は大和國、城上郡（しきのかみ）（現今の磯城郡（しき））の地名で、垂仁・景行二帝の皇居し給うたところである。現今でいへば、纒向村のひがし穴師卷野内

あたりの稍ひろき地である。「萬葉集」には、『卷向の由槻が岳に』『卷向の足痛の川ゆ』『みもろのその山竝に子らが手を卷向山は』『卷向の山べとよみて』『卷向の岸の小松に』『卷向の川音高しも』『卷向の檜原の山を』『卷向の檜原に立てる』など、山・岸・川・檜原山に續けてゐる。これは、卷向にある川・山・岸といふのであるが、『卷向山』『檜原』などはすでに固有名詞になつてゐるのである。

○（五十四頁）の、『まきもくの檜原のあらしさえさえて弓槻が嶽に雪ふりにけり』も卷向山の麓に檜原があり、弓槻が嶽は卷向の高峰なのである。「私鈔」の解釋には不備の點あるゆゑこゝに訂す。この歌では、檜原が近くにあつて弓槻が嶽が遠くにある趣といふのは、「私鈔」で云つたとほりである。　○（百○四頁）の、『菅原や伏見の里』は、今は大和國生駒郡にあつて、伏見村が總名で菅原が小字になつてゐる。此歌を作つた頃は其反對であつたのである。こゝは武内宿禰とその子孫の住んだといふところで菅では繁盛したのである（三浦周行氏。歴史と人物。十七頁）葛上郡にも、菅原伏見の地名があるが、そこではない。

○

（九十二頁）の、『いつもかく寂しきものか蘆の屋に焚きすさびたる蜑の藻しほ火』の、『藻鹽』を解いて、『海藻に幾度も汐水をそそぎかけそれを煮て得たる鹽の事である云々』といつたが、『……汐水をそそぎかけその潮垂をあつめそれを煮て……』と訂す。これも製鹽法の一部に過ぎず、また『藻鹽』の解にも異說があるから、煩をいとはずそれを抄して批評することとする。「宇比麻奈備」下卷の定家の歌の解中には『藻しほといふは、藻を苅集めて、それに潮を汲かけて、日にほしたるを簀の上につみおきて、又更に潮を汲かけてたるゝゆゑに、藻しほといへり』とあり。「倭訓栞」には、『海藻を苅り集めてそれに潮を汲みかけて日にほしたるを簀の上に積み置て、更に潮を汲みかけてたるゝ也。よて藻鹽草とも藻鹽垂ともいふ也。また藻を燒て性を存し漏鑑に盛て潮水を汲て澆ぎ、其

水を釜に入れて煮て鹽をもとるをもて藻鹽火とも藻鹽燒ともいへる也云々』と
ある。後世の辭書の多くは、その鹽分を多く含ませた藻を燒いて其を水に溶か
し其上澄を釜で煮て鹽とすると解いてゐる。「言海」「言葉の泉」「辭林」など皆さ
うである。「日本大辭林」には、『藻を簀やうのものにのせ、汐をくみかけてはほ
し、くみかけてはほしして、汐のしみたるとき、更に汐をかけてあらひて、そ
のあらひたる汐を白鹽(しらしは)につくりなすといふ。またその汐をかけたる藻を燒
きてとるともいへり。さだかならず』とある。此は「倭訓栞」から由來してゐる
が、製鹽法に二種類あるといふやうに考へてゐるのである。予が「私鈔」に書い
たのはその一法なのである、ところが、關岡野洲良の、「囘國雜記標注」には以
上の說を全く否定して解いてゐる。『(前略)野洲良考に、これらの說皆藻といふ文字
になづみて誤りたり。鹽濱にて見るに、汐は砂に汲かけて日に干しつけて又も
汲かけ汲かけして、それをたるゝは常の事なれども、藻に汐を汲かくるといふ

も似たることながら、砂には鹽のとまれども藻には鹽のとまるべくもおぼえず
(中略)しかれば、藻鹽草と書たる字は借字にて、實は眞鹽種の意なり。眞の發語を
毛にかへたるは音通の故なり。(中略)彼潮を汲かけたる砂は卽ちもしほ種なり。故
にかきあつむるよし歌に詠り。續古今集賀。わかの浦に波よせかくるもしほ草
かきあつめても玉も見えける。太上天皇』といつて居る。予考ふるに、「標注」
の、『藻しほ草』は『眞鹽種』の意だとするのは附會の說に過ぎない。又野洲良
の實見したのは、いはゆる『鹽田法』の一種法であるから、『藻しほ』には當嚴
らないのである。予又考ふるに、古代の、『藻鹽』の法は、今のいはゆる『煎熬
法』のうちの、『枝條架法』の一種法と看做すべきものではあるまいか。さうし
て、その『藻鹽』の法には、藻ぐるみ燒く法と、藻は燒かない法と二とほりあ
つたのではあるまいか。いまの『枝條架法』では、枝條は燒かないのである。ま
た、考ふるに、『藻しほ火』は、もとは製鹽のための焚火であつたものが、後世

には必ずしもさうでなくも、海濱で何かのための焚火でも『藻しほ火』といつたものではあるまいか。又現代ならば、製藻のための『かじめ燒く』火をも、『藻しほ火』といつて、歌によんでも差支はあるまいと思ふが奈何。『藻鹽』に關して「私鈔」の原の解の不備について、明石敬吉氏が注意せられたことを感謝する。

參考歌を少し書く。『淡路島、松帆の浦に、朝なぎに、玉藻かりつゝ、夕なぎに藻鹽燒きつゝ』（萬葉卷六）。『こぬ人を松帆の浦の夕なぎにやくや藻鹽の身もこがれつゝ』（藤原定家）『旅の空よはのけぶりとのぼりなばあまのもしほ火たくかとやみむ』（後拾遺花山院）。『沖つ風よさむになれや田子の浦のあまのもしほ火たきまさるらむ』（新古今越前）。『なびかじなあまのもしほ火たきそめて煙はそらにくゆりわぶとも』（新古今定家）。『いとどしく家路へだつる夕霧にあまのもしほ火けぶり立そふ』（藤原定家）など。

『蘆の屋』は蘆などにてふいた粗末な海士の家といふので、『あしのまろやに秋かぜぞ吹く』などともあるが、必ずしも蘆の字に拘はらないでもよい。

○

（二〇頁）の『春ふかみあらしもいたく吹く宿は散りのこるべき花もなきかな』の解に『眼前落花の景に見入つて』作つたやうに云つたが、併し此は矢張りもつと概括的な歌である。なほ、『あらしはこゝは本來の意味を失つて』云々と云つたのは、『嵐を巧みに用ゐられしは後なり』と賀茂眞淵が云つたのと同じ心持である。なほ、『あらしのといふべきところである』の句も削る。○（十三頁）『玉藻かる井手の柵春かけて』の歌に就て、尾山氏云。『春かけては春にかかつての方よし。柵とあるを以て特更春かけてと云へるかとも思ふ』。○（三十二頁）『秋風は稍肌ざむく』を『秋風はやゝ肌さむく』と改む。○（四十四頁）の『音羽山やまおろし。ふきてあふ坂の關の小河に氷しにけり』の歌が貞享本には第三句、『吹く』

第四句『小河は』となつて居る。　○（四十八頁）の『笹の葉に霰さやぎてみ山べの嶺の木がらしきりて吹きぬ』の『しきりて』は『吹き頻りて吹きぬの意ならむ』と尾山氏が云つて呉れた。かく動詞にして解する方がよい。予の解の『しきりに』は副詞になるから妙味が薄らぐ。（愚秘抄には結句しき吹きぬとある）　○（四十九頁）『さゝの葉のみ山もそよに霰ふり寒き霜夜をひとりかも寢む』の初句一本には『さゝの葉は』、第二句『みやまもさやに』とある。此歌は、新古今冬部、良經の『笹の葉は深山もさやにうちそよぎ氷れる霜をふく嵐かな』や、萬葉集卷二の『さゝの葉はみ山もさやにそよげども我は妹もふ別れ來ぬれば』の歌に似て居る。此は尾山氏がいつてくれた。

○

（六十四頁）『須磨の浦に蜑のともせる漁火のほのかに人を見るよしもがな』に似た歌で、『志賀のあまの釣にともせる漁火のほのかに妹を見むよしもがも』（萬葉集卷

二十）といふのがある。又『志賀の浦の釣に灯せる漁火のほのかに人を見るよしもがな』（拾遺集。坂上郎女）といふのもある。拾遺のは萬葉のを勝手に改めたので、實朝の方は拾遺の、眞似である。此は古泉千樫氏が云つてくれた。　○（六十六頁）の『今來むとたのめし人は見えなくに秋風さむみ雁は來にけり』の歌、貞享本には、『遠き國へまかれりし人八月ばかりには歸り參るべきよしを申して九月まて見えざりしかば、彼の人のもとにつかはし侍りし』といふ詞書がある。予の解は、此詞書を念頭において改めねばならぬ。　○（一三五頁）の『ある人の都の方へのぼり侍りしにつけてよみて遣はす』の『ある人』は夫人だらうと想像したが、此は矢張り女房か何かであるらしいと土屋文明氏がいつた。○（四十七頁）の十一行の、『眞淵の、信濃なる管の荒野、と同じ樣に死んだ地名に過ぎないものとなる』といふ意味は、實地に寫生せずに空想て作ると、固有名詞に魂が入つてゐない少しも活躍しないといふつもりなのてある。　○「實朝雜記」のなかに『主あ

る詞』云々をいつたのは、大體、時代の風潮を云ふために用ゐたので、此熟字は、爲家あたりの造語であることは彼の歌學書に見えてゐるのでわかる。

○

（七十二頁）『箱根路をわが越え來れば伊豆の海や沖の小島に波の寄る見ゆ』の歌につき、佐佐木博士云。『箱根路の歌は、思ふに、眼前實景に對して感じたまゝを詠むに、胸中にあつた古歌の調が浮び出たものである。これらを萬葉の口眞似といふのは當らない。萬葉の『逢坂を』の歌よりも、かへつて素朴で、自らその純眞なる叙景のおもしろみが「田子の浦ゆ打いでゝ見れば」の歌と相通ずる所がある。この歌に就いては、いづこにて詠んだかといふのが問題であらう。自分は詞書によつて二所詣の折の作と思つてゐる。犬鷄隨筆に、「湯坂の手向より伊豆の大島を御覽じてよませ給へることと思ひ定むべし」とあるは、誤である。近い頃、好古雜誌の竹村茂正の考を見たに、二所詣の途なる背通路の作と記し

てある。吾人と同説の人が夙くあつたことを見て、喜んだことであつた』（アララギ九ノ八）

○

（六五頁）の、『實朝は眞實から戀歌を詠むやうな境遇に居なかつたのだかも知れない。若しあつたとしても相手は平凡な……この樣な關係から戀歌は形式歌に墮したのだかも知れない』の文を削る。　○（七一頁）九行の、『實朝の歿後』を削る。（もつとも、此は集の成つた年代を示すつもりであつたのであるが）如願法師は藤原秀能の法名である。　○（七五頁）の、『鳴きなむ』を『鳴きたい』と解したのは惡い。『鳴くであらう』の意である。此誤は普通の文法書に據らないで、某氏の說を採つた爲めである。　○（一〇八頁）二行の、『後拾遺』は『續拾遺』の誤。（一二一頁）七行の、『下影時歌』は『下預時歌』の誤。　○（一二九頁）十行の、『後來定家の言として傳へらるる』を、『定家の詠歌大概に記せる』と改める。（七頁）の『このねぬ

る』の歌評中、『有名な程に』の句を削る。　○この項は佐佐木博士の指摘によつて改めたのである。

○

（八二頁）の、『今つくる三輪のはふりがすぎ社すぎにし事は問はずともよし』の歌について、佐佐木博士云。「今つくる」云々の歌は、「住吉の」と同じく、屏風の歌などで、一句も二三句も萬葉の成句を用ゐたもの、上句を序とし、下の句に意味があるのであらう。　○（九二頁）の、『いつもかく寂しきものか蘆の屋に焚きすさびたる蜑の藻しほ火』について、佐佐木博士云。「いつもかく」の歌は、自分は畫の景を詠んだものの、「諸所に焚く火」を見渡したものではなく、とある小家の藻汐火を見ての作と思ふ。　○（四六頁）の、『もののふの矢なみつくろふ手の上に霰たばしる那須のしの原』の歌につき、佐佐木博士云。「もののふ」の歌、第三句は、「うへに」と字餘りに讀んだ方が、重みを添へてよいと思ふ。

これは繪卷物などのけしきから思ひうかんだものらしい。　茂吉云。此は感謝すべき說である。　○なほ、博士云。（一一頁）の『かつらぎや』の歌は時樣の作に過ぎぬ。（一三頁）の、『玉藻かる』の歌は、初期の作で抄出すべきほどのものではない。なほ、此歌の、『しがらみ』に、『かけて』が掛つてゐるのである。（三四頁）の、『ぬば玉の』の歌は、萬葉にあり古今にも載せられた、『さよ中と夜はふけぬらし雁がねのきこゆる空に月わたる見ゆ』の模倣である。

○

（二四頁）の、『ほととぎすきけども飽かず立花の花ちる里の五月雨の頃』の參考歌として、『橘の花ちる里のほととぎす片戀しつゝなく日しぞ多き』（萬葉卷八）と、『橘の花ちる里に通ひなば山時鳥とよもさむかも』（萬葉卷十）を書く。　○（二六頁）の、『吹くかぜの涼しくもあるかおのづから山の蟬なきて秋は來にけり』の參考歌として、古事記の、『山かたにまける青なも吉備人と共にしつめばたぬしくも

あるか』萬葉卷十九の、『新しき年の始に思ふどちいむれてをれば嬉しくもある
か』を書く。なほ、『涼しくもあるか』を、『涼しくあるかな』と翻したのを、『涼
しくもあることかな』と改む。右專ら佐佐木博士の言に從つて書く。

○

「私鈔」に二ところばかり書いた、有名な定家の歌、『ながむれば花も紅葉もな
かりけり』の初句は、『みわたせば』の誤である。この記憶の錯誤は、西行の、
『田家秋夕。ながむれば袖にも露ぞこぼれける外面の小田の秋の夕ぐれ』を半
ば心中に持つてゐたせゐてあつたのであらう。　○（九十一頁）の、『玉くしげ箱根の
みうみけけれあれやふた國かけてなかにたゆたふ』の參考歌として、「古今集」
の、『甲斐が根をさやにも見しがけけれなく横ほり伏せる佐夜の中山』を書く。

○

（二十六頁）の、『ふく風の涼しくもあるか自づから山の蟬鳴きて秋は來にけり』の

歌の初句、貞享本には、『吹く風は』になつてゐる。　○（四十九頁）の『さゝの葉のみ
山もそよに霰ふり寒き霜夜をひとりかも寢む』の初句、一本には『さゝの葉は』
第二句『みやまもさやに』とある。　○（六十頁）の、『苔ふかき石間をつたふ山水
のおとこそたてね年を經にけり』の第四第五の句、一本には、『音にこそたてね
年は經にけり』とある。　○（五十八頁）の、『かつらぎや山を木高み雪しろし哀とぞ
おもふ年の暮れぬる』の歌、貞享本には、『かつらぎや雲をこだかみ雪しろし哀
と思ふ年の暮かな』とある。　○（十一頁）の、『かつらぎや　…夕ゐる雲に春雨ぞ
ふる』の歌の結句一本には『春風ぞふく』とある。　○（四十四頁）の、『音羽山やま
おろし吹きてあふ坂の關の小河に氷しにけり』の歌、貞享本には、『やまおろし
吹く……關の小河は』とある。　○（六十三頁）の『山遠み雲井に雁の越えていなば
……ねにや鳴きなむ』の結句『ねにやなくらむ』といふのがある。此は塚本哲
三氏の校訂本に據つた。　○（八十二頁）の、『今つくる三輪のはふりが』の歌の初句

が、塚本氏校訂本には、『今つぐる』となつてゐる。これは恐らくは誤植であらう。　○（八十五頁）の、『伊豆の國山のみなみにいづる湯の』の歌の初句が、塚本氏の校訂本には、『伊豆の國や』とある。　○（九十一頁）の、『玉くしげ箱根の海はけけれあれや二くにかけれあれや』の歌、貞享本には、『玉くしげ箱根のみうみけて何かたゆたふ』となつてゐる。　○（百十頁）の、『時により』の歌の詞書が、貞享本には、『建暦元年七月洪水漫天土民愁歎きせむ事を思ひて一人奉向本尊聊致祈念と云』とある。　○（百十九頁）の『山はさけ海はあせなむ世なりとも君に二心われあらめやも』の結句が、「增鏡」引用の此歌には、『わがあらめやも』となつてゐる。

○

（三十六頁）の、『露霜』を解して、『秋の末になつて霜ちかきころの露をいふ』と云つたが、元來この『露霜』の解には三つの說がある。一つは予の書いたやうな

『寒露』の說。二つは單に『霜』の事であるといふ說。三つは單に『露』のことであるといふ說である。

「圓珠庵雜記」に云。『露霜といふにふたつあり。ひとつには露と霜となり。常のごとし。ふたつには萬葉第七、同第十に、詠露といふ題に露霜とよみ、その外露霜さむみなどあまたよめるは、秋の末に至りて露のこりて霜となるほどの名なり。これをば霜をにごりていふべし。眞淵頭註に云。萬葉七、ぬば玉のわがくろかみにふりなづむあめのつゆ　つまこひにしかなく山の秋はぎはじもとれば きえつゝ　つゆじもさむみさかりすぎゆく　能因歌枕：露霜とは秋の霜をいふ』

「萬葉集抄」に云。『露霜と云事、先達の料簡まちまち也。或は露をつゆしもと云。霜は露のなる物なれば露をつゆしもと云といへり。これは因中說果の義にあたれり。或は霜をつゆしもと云。露凝成」霜也。これは從本立名の心也。或は九月ばかりの寒露をいふ。露の霜に成ほどなれば露霜と云。霜にもなりはてず

なほ露にて又露にもあらぬほど也。是は中間の位にあたれり。三の義の中には、此義甚深也。又今の歌の如くならば、只露と霜とにかなへりといへる義也。』

「冠辭考」に云。『前略さて「露じも」の「し」を濁るべし。此反歌にもみぢばの散のまがひにとよみたれば、秋ふけてなかば、霜を兼ねたる露をいふべき也。さらずば、「白露の」「おく霜の」などいひて、わづらはしく「露霜」と重ねじかし。古今集に「萩の花ちるらん小野のつゆじもにぬれてをゆかんさ夜はふくとも」とよめるもしかなり』

「玉勝間」に云。『萬葉集の露霜　萬葉集の歌に、露霜とよめる卷々に多し。こは後の歌には、露と霜とのことによめども、萬葉なるはみなただ露のこと也されば七の卷十の卷などには、詠露といへる歌によめり。多かる中には露と霜と二つと見ても聞ゆるやうなるもあれど、それもみな然にはあらず、たゞ露也これにさまざま說あれども皆あたらず。そもそもたゞ露を、露霜といはむこと

はいかにぞや聞ゆめれども、此名によりて思ふに、志毛といふは、もとは露をもかねたる總名にて、其中に氷らでありを、都由志毛といひ、省きて都由とのみいへる也。そは都由は粒忌のよしにて、忌とは清潔なるを云。雪の由も同じされば「つゆしも」とは、「粒だちて清らなる志毛」といふことにぞありける』

「古義」も「玉勝間」の說を紹介し、「東雅」の露の解も、「音圖大全解」の說も宣長の言を保證するやうなものてある。佐佐木博士も、「玉勝間」の說に從ふべきだと云はれた。然し予はしばらく宣長の說に從ふことを欲しない。予は、こちたき語源說、音義說よりも、眞淵の、『わづらはしく露霜と重ねじかし』といふ直截な、製作時の心理を洞察した說を好むからてある。附記。予は「萬葉集抄」を直接讀まない。「古事類苑」に據つてその說を書いたのてある。

○

（四十六頁）の、『ものの ふの矢並つくろふこての上に霰たばしる那須のしの原』の

歌に就て少しく意見を述べたが、佐佐木博士は、此は繪卷物などの景色から思ひ浮んだものらしいと云つた（アララギ九卷八號）。さうすると予の意見がだんだん確かになつて來る。なほ、國學院雜誌第十八卷第十一號の應問欄で此歌を解し、『やなみつくろふは征矢の列のみだれたるを直すなり小手は籠手にて臂鎧なり』と云つてゐる。さうすると、同誌第十二號（大正元年十二月）で、彌富濱雄氏が、『實朝の「武士の矢なみつくろふ」の歌につきて』と題していろいろ疑問を提出してゐる。氏の言を鈔すると次の如くである。『矢なみつくろふ』といふことは、『箭列繕修の義なり』（谷川士清）。『負ふ征矢の亂れを直すとて肩の上にやりたる其小手を云々』（賀茂眞淵）などの解釋などでは未だ明瞭でない。戰場に於てか狩場に於てか、手は右手か左手か、臂鎧は左手に附けるのを普通とせば征矢の亂を直さうとしてやつた手は右手なるべき筈であるのにさうすれば籠手がをかしい。次に「類聚名物考」には、「採梔集覽」の說を引いて、『歩立の矢代ふる樣にねつるを

いふなり。腰指此分に捻るなり』といひ、鳥飼醉雅子の「東國名勝志」（寶曆十二年刊）には、那須野にて騎馬の武士一人は矢を弓に番ひ、一人は矢の曲りを矯しつゝある繪をかいて其うへの方に實朝の此歌が書いてある。以上を綜合してみると『矢なみつくろふ』の解には、舊說以外に、一、矢を弓に番ふること。二、矢をねぢること。三、矢の曲を矯むることと解した人のあることが分かる。それにしても未だ正當の解を得ないといふのである。國學院雜誌第十九卷第一號で丸山正彥氏が、『彌富君に答ふ』と題して、『やなみつくらふ（茂吉云。氏はつくらふと書いてゐる）は敵なり獸なり的なりに對ひて、照準を定め狙ひにねらひ、ためつすかしつ今將に射出さんとするとき、全身の力籠手に籠れるをりをいふ』といつてゐる。なほ緒方小太郎氏は同第二號で此事を論じ、按ふに谷川・賀茂兩翁の說も其他の諸說も經驗ある論とは思はれない。何となれば箙に固くからめた矢は容易に亂るべき性質のものではない。普通の矢搦ても、極意矢搦みても叶矢搦みてもさうて

ある。そこて此歌の『矢なみつくろふ』は、『矢なみの實際みだれたるにあらず負ひたる征矢の少し何れにか片寄りて便宜上矢をぬくに工合よき腰のあたりに箙を引直すをおほかたに矢列つくろふといひしものとぞ思はるゝ』と云つてゐる。予おもふに、此歌は矢張り從來の解釋に從ふ方がよいやうてある。歌つくりは、さう服飾の考證に都合のよいやうにばかりは作らぬことがある。第一、『須那のしの原』などといふあたりは、歌に一種の勢ひを附けようとして歌つてゐるのてあつて、『ものゝふの』ても、『霰たばしる』ても皆さうてある。『ものゝふに霰たばしる』といはずに、『籠手の上に霰たばしる』といつたのも、歌に一つの調をつけんが爲めてある。そこて若し此歌から強ひて形象を浮び出さうとするなら、那須の原に軍勢のゐる光景で、そのうちの重立つた一人が、どうにかして箙の矢を整へてゐる光景を、ぼんやり浮べればよいので、籠手ある手が左手か右手かなて心配するのは無理てある。併し此歌の缺點はそこにある

ことを注意せねばならぬことは既に「私鈔」中て云つた。『つくろふ』は繕ふ。整ふる。などの意で、『入道はかの病つくろはむとて、鎌倉より伊豆の國へいてゆあびに越えたりけるほどに』（鏡增）などても分かるやうに、多勢して矢竝をつくり、ねらひを定め調へることてはなからうと思ふ。古代エヂプトの繪にあるやうな同列多勢が同樣の格好て弓を番へてゐるところや、「蕙齋略畫式」にあるやうな作列の構圖の光景とはどうも思はれない。併し、これも雋敏精到な學者の說に待つよりほかはないと思つてゐる。

なほ參考のため『霰』の入つてゐる歌數首をかいておく。

我が袖に霰たばしるまきかくし消ずもあらむ妹が見むため（萬葉）
霜の上に霰たばしりいやましにあれはまゐこむ年の緒ながく（萬葉）
雪の上天つひれふる少女がかざみの袖に霰たまちる（新續古今）
大空にたがぬく玉の緒だえして霰たばしる野べのさゝ原（拾遺愚草）
打拂ふこゝちこそせね旅衣袖にたばしるいまのあられは（忠度集）

（八十六頁）の『大海の磯もとどろに寄する波われてくだけて散るかも』の歌は、題詠ではないと感じ、鎌倉の海岸か、杜戸あたりか、或は、建保五年（實朝廿六歳）九月十三日の東鑑記の、『將軍家爲レ御二覽海邊月一渡二御三浦一』のときではあるまいかと思つてゐたが、佐佐木博士の、『畫題としての源實朝』（文と筆所收）にも、此歌は三浦三崎に遊んで、三崎の絶壁を見つゝ口ずさんだ歌であらうといつて居る。

○

（一〇一頁）の『時によりすぐれば民のなげきなり八大龍王雨やめたまへ』の歌の詞書（ことばがき）には、『建暦元年七月洪水漫天土民愁歎（歎せむ）きせむ（一本、愁）事を思ひて一人奉向本尊聊致祈念（致祈念）と云（一本、聊）』とある。さうすると建暦元年は丁度、實朝が廿歳のときである。

實朝は十四歳の時すでに和歌を詠んで居る。吾妻鏡元久二年四月十二日の條

に、『將軍家令詠十二首和歌云々』とあるのは卽ちそれである。同年九月に新古今和歌集をはじめて讀んでゐる。それ以後しばしば和歌會の催しがあり、自らも作歌した。そのとき近臣のものから和歌の話、和歌文書の話、京都歌壇の話などを聽いたに相違ない。承久二年、實朝十七歳の時兵衞尉清綱が鎌倉に下つて、相傳物と稱する古今和歌集一部を實朝に献じた。吾妻鏡に、『殊有二御感一又令レ尋二問當時洛中事一給』とあるのを見ると、實朝の非常に喜んだことが分かる。『當時洛中事』といふうちには、京都歌壇の事も含んでゐたに相違ない。承元三年、實朝十八歳の時、今まで作つた歌の中から三十首を撰んで、定家に合點を乞うた。約一ヶ月を經て定家は合點を加へた詠草を返進する次手に、詠歌口傳一卷を進上した。その後、定家が相傳私本の萬葉集を實朝に贈つたのは、實朝廿二歳の十一月廿三日であるから、此の、『時によりすぐれば民のなげきなり』の歌を作つたのを建暦元年とせば、實朝がいまだ萬葉集を直接には讀まな

かつた時である。（萬葉集中の歌の若干首は從臣を通して聞いたであらうし、又萬葉集の重寶である事をも聞いてゐたであらうが。）

建暦元年が丁度實朝廿歳の時に當ることを未だ知らなかつた時、予は『時によりすぐれば民の歎きなり』の歌を讀んで、此は確かに萬葉集を讀んでから後の作に屬すると感じ、さう信じて居た。然るに此歌が廿歳のときの作で、定家の合點を乞ひ定家の歌風を模倣してゐる時代の作と知つたとき、予は一面には驚き一面には解釋に迷うた。定家が新勅撰集に取つた『春きては花とか見えむおのづから朽木のそまにふれる白雪』の歌を賀茂眞淵が評して『朽木に花を用ゐられしはまだしきはじめの歌なり』と云つたが、朽木に花の歌は萬葉調の歌ではない。また『涙こそゆくへも知らねみわの崎さのゝわたりの雨の夕ぐれ』といふ實朝の作は、全く定家の『駒とめて』の歌の模倣に過ぎない。かういふ綺麗な定家流の歌を作つてゐた廿歳ぐらゐの時に、なぜ實朝は『時によりすぐれば民の歎きなり』の如き直截な寧ろ萬葉調とも稱すべき歌を作つたであらうか。予の驚いたのはこの點である

予はまづこれに解釋を付けようとして次のやうに考へた。實朝は作者としても鑑賞者としても最初から優秀な點を示してゐたに相違ない。萬葉集を讀んで萬葉集の歌を理會し得たごとく、定家流の綺麗な歌を詠みながらも間々眞實直截な歌をばおのづからにして作り得たのではなからうか、そして其が卽ち『時によりすぐれば民の歎きなり』のやうな歌であつたのではなからうか。特に、新古今集釋教歌の中に、

比叡山の中堂建立のとき　傳教大師

阿耨多羅三藐三菩提のほとけ達わがたつ杣に冥加あらせ賜へ

入唐の時の歌　智證大師

法の舟さして行く身ぞもろもろの神も佛も我をみそなへ

といふ歌がある。この二つは纖巧な當時の歌風の代表歌とは謂はれない。實朝

は新古今集を讀んでゐて、是等の歌を眞に理會し得たのではなからうか。もしさうとせば、廿歳にして、『時により』の歌を作つたとて、少しも不自然ではないのであつて、實朝が歌人として飽くまでいゝ天品を有つてゐたことを證するものである。また、『時によりすぐれば民の歎きなり』といふ上句に、何となく稚拙なところがあり、第三句切であり、何となく當時の歌調の面影のあるのも解明することが出來る。かういふ風にひとりで解決をつけて心に一種の安定を覺えた。

しかし此歌は矢張り實朝が萬葉集を讀んでから後に作たものではあるまいかといふ念が時々起つた。そして詞書の『建暦元年』といふのが他の年號の記し誤てはあるまいかといふ念が起つた。もつとも、この疑念の起つたのは他にも例があるからであつて、金槐集冬部の、『ぬし知れと引きける駒の雪を分けばかしこき跡にかへれとぞおもふ』といふ歌の詞書には、『建暦二年十二月』とある

のに、吾妻鏡には『建保元年十二月廿日』の條に書いてある。卽ち、金槐集の詞書の方が誤まつたのである。そこで『時により』の歌の詞書にある建暦元年は、それよりも以後の年號の誤ではあるまいかと思つたのである。ことに『ぬし知れと』の歌を建保元年十二月（實朝廿二歳）の作とせば、『時により』の時がそれより以前の作とは受取れないと思つたのである。

そこで吾妻鏡を繰つて、『洪水』の事柄が書いてあるかどうかを檢して見た。さうすると、建暦元年の七月の記事は大概は天氣晴であつて特別に洪水の事が記されてゐない。もつとも、記事の缺けて居るところの天氣の奈何は分からない。たゞ七月三日の條に、『三日壬子、晴。酉剋大地震牛馬騷驚』とあるのみである。建暦元年の條に失望した予は、建暦二年・建保元年・建保二年と繰つて行つた。さうすると建保二年の條に思ひ當る事が書いてある。

五月廿八日壬辰。炎旱依レ涉レ旬、於二鶴岳宮一被レ行二祈雨御祈一云々。　六月一

日。甲午。晴。及レ晩聊雲起雷鳴。是御祈請驗歟。六月三日。丙申。霽。諸國愁ニ炎旱一仍將軍家、堀ニ葉上僧正一爲レ祈レ雨。持ニ八戒一轉ニ讀法華經一給。相州己下、鎌倉中緇素貴賤讀ニ誦心經一一心潔信、而被レ致ニ精勤之誠一也。六月五日。戊戌。甘雨降。是偏ニ將軍御祈懇之所レ致歟。皇極天皇元年壬寅七月、天下炎旱之間、雖レ有ニ方々祈禱一依レ無ニ其驗一大臣蝦夷、自取ニ香爐一祈念。猶以雨不レ降。同八月、帝幸ニ河上一令レ拜ニ四方一御之間、忽雷電、五箇日不レ休。國土百穀、歸豐稔云々。君臣雖レ異。其志相同者歟。七月廿七日。庚寅。終日甚雨、今日大倉大慈寺（號新御堂）供養也。八月七日。己亥。甚雨洪水。大倉新御堂惣門顚倒。八月十五日。丁未、霽。子尅日飾今日鶴岡放生會也。

次ぎに參考のために、百錬抄を見るに、

建暦元年。六月廿一日。依ニ炎旱一被レ行ニ五龍祭一。八月四日。甚雨大風。建保元年。八月一日。被レ立ニ祈雨二社奉幣使一。建保二年。八月十日。天陰雨降

大風吹。洛中舍屋破損顚倒、不レ可ニ勝計一。尊勝寺大門顚倒。

これによつて見るに、建保二年は八月十日前後に雨が強く數日間降つて洪水が出たことが分かる。吾妻鏡と百錬抄の記事を互に參照すると、鎌倉も京都も大體に於て天氣の有樣が一致するやうである。「百錬抄」建保五年正月の條に『去年大風洪水之時顚倒流失之間』とある洪水は建保二年の此洪水であつたかも知れぬ。そこで實朝の、『時により過ぐれば民の歎きなり』の歌は、建保二年の八月十日前後に作つたものではなからうか。さうして、六月の炎旱に際して、祈雨經法を修した實朝が、八月十日前後に意外にもこの强雨に際したが爲めに、『時により過ぐれば』と云つたのではあるまいか。さうすると、この歌の中の『過ぐれば』の句が如何にも活躍するやうにおもはれる。藤原定家の「明月記」を讀むと建暦元年の七月の京都の天氣は大概晴であること鎌倉の天氣（吾妻鏡參看）と略同樣である。建保二年では六七八月の記事が缺けて居る。以上のやう

な心の經過に依つて、予の考は二たび以前にかへつたのである。即ち以上の言を要約すると次のやうになる。

此歌は、詞書には建暦元年七月作とあるが、實は、建保二年八月十日前後の作ではあるまいか。即ち、此歌は實朝が齡二十歳で未だ萬葉集を直接讀まなかつた時の作ではなく、實朝が齡二十三歳で萬葉集を直接讀んでからすでに半年を經過した時の作ではあるまいか。

以上の予の言は、考證としては甚だ粗笨である。しかし予の言は、作歌經驗から得た直觀に頼るのであつて、史料が都合よく予の直觀の結果と一致せば妙であるが、一致しないと謂つても、予の直觀の結果をば予は全然放棄することを欲しない。そして若し後世に予と志を同じうする士が出でて、精しき考證を遂げて異れる事があつたら予の心は幸福である。また單に此歌一首について、特にその製作の年代に就いて、かかる考案をなすのは無駄の觀をなすかも知れ

ぬ。然し予自身にとつては、可なり重い意味を有つのであつて、此歌は歌人實朝を考察するの貴重材料だと思ふのである。予は實朝を眞に尊敬するものであるが、これを偶像化しようとは思はない。天才と謂つても苦力によつて生長する。偉大な藝術家の跡を見るに、彼等は他の大きな藝術の前に開眼したときを以て、彼等の生長史の眞の出發をなしてゐる場合がある。それゆゑに、實朝の『八大龍王雨やめたまへ』の歌が、萬葉集を直接讀んだ以前の作か以後の作かといふことを考察するのは決して無意味ではないのである。特に作者たる予にとつて無意味ではないのである。

(＊＊＊) 金槐集には、『建暦二年十二月、雪の降侍りける日、山家の景色を見侍らんとて、民部太夫行光が家にまかり侍りけるに、山城判官行村など數多侍り和歌管絃の遊ありて、夜ふけて歸り侍りしに、行光黒馬をたびけるを、又の日見けるに立髪に紙を結び侍るを見れば。『この雪を分て心の君にあれば主しる駒のためしをぞひく』。返しとして、『主しれと』の歌が書いてある。○吾妻鏡には、建保元年

十二月廿日の條に、『今朝將軍家御覽ニ去夕行光所レ進馬一、面結ニ紙於其立髮一、召ニ寄之一、披覽之處、此雪ヲ分テ心ノ君ニアレバ主シル駒ノタメシチヂヒク。如ニ此載レ之將軍家數反以ニ御詠吟一、行光所爲優美之由及ニ再三御感一、相ニ叶賢慮一之故也、即染ニ自筆一、被レ遣ニ御返歌一、撰ニ好士一、以ニ内藤馬允知親一、爲ニ御使一』とあつて、此歌がある。

（＊＊）實朝の祈霽した雨は、霖、長雨、連雨、苦雨などの字に當るかとおもふ。霖三日以上雨也とあるが、霖と萬葉集などの長雨（ながめ）、霖雨（ながあめ）が大體おなじと見てもよからうと思ふ。その時の雨は霖であつて、『大風甚雨』であつた事、建保二年の條の吾妻鏡の記事のとほりであつたのであらう。（大雨（ひさめ）、暴雨（むらさめ）甚雨（ひさめ）などの名おのおの相通ずると看てよい。）この霖は梅雨ではなく、いはゆる低氣壓性降雨で、特に颱風に伴つた甚雨であつたであらう。颱風の本邦におこる月別回數を見るに、八月九月が最大數を占めてゐる。即ち陰曆では七月八月の交になる。そして颱風は一晝夜若しくは長時間にわたる强雨を伴ふのを常としてゐる。（椿説弓張月に、颱風は一晝夜或は數日にしてなほ止まず、とある。）たゞ颱風進行の方嚮は本邦に於ては北東又は北が多いから、鎌倉が八月七日に甚雨で、京都が八月十日に甚雨であつたとせば颱風の方嚮に合致しないやうであるが、此は甚雨が四五日つゞいたと見れば說明がつくと思ふ。

（＊）建曆元年七月八日の吾妻鏡の記事に甚雨洪水のことが書いてないといつても、記事の缺けてゐる日が多いのであるから、その記事の缺けてゐた日に甚雨があつたかも知れぬ。由來本邦では毎年、立春から二百十日目、二百廿日目、或は八朔などに颱風の襲來あることが多い。そこで建曆元年七月が必ずしも天氣平穩であつたといはれない。然し、少しく著明な事ならば書き漏らす事のない吾妻鏡に、洪水漫天土民愁嘆ほどの大洪水の記事のないのは不思議である。たゞ縱ひ建曆元年七月に雨が降つても、さうひどくなかつたと見るのは必ずしも妄ではあるまい。

附記。建保六年七月十七日の吾妻鏡の記事に、齋藤左衞門尉基貞が御代官となつて相模國大山寺に參詣した事があるが、建曆元年にも建保二年にもかかる記事はない。すなはち此の祈霽の歌は公の儀式で奉向したのでないことが分かる。此歌の詞書も後人が誤つて寫記したのかも知れない。祈霽の歌の參考歌として、山家集雜部の、『あまくだる名を吹上の神ならばそら晴れのきて光あらはせ』『なはしろにせきくだされし天の川とむるも神の心なるべし』を書いておく。

○

（一一五頁）實朝の歌、『父母に心はわくとも人に云はめやも』（詞書の下影は下預の誤り）の『わ

くとも』は、(一)分かるとも、知れるとも。(二)分離するとも、そむくとも。のいづれかに相違ない。そのうち予の解は佐佐木博士の教示によつて(二)の説と定めたのである。尾山篤二郎氏は予の解が未だ不十分だと謂つて次のやうに注意を與へられた。尾山氏云。『心はわくともは、己が心は父母に分くる、卽ち半ば以上も父母のものとして分ちてはゐるけれどもといふ方心得易し。分ける分配の謂なり。若し然らずとするも斯く解し得る餘地十分也』。予は暫らく氏の説には贊成しない。併し參考として書留めなければならぬ。又「短歌私鈔」發行後、田中常憲氏の、「金槐和歌集註釋」(明治四十年五月。東京龜井支店書籍部發行)といふ書物を見つけた。此書では、『わくとも』を解して、『心はわくともは、心を語り明かすとも也』と謂つて居る。併し『わくとも』に縱ひ『知れるとも』の意味があつても、こつちから語り明かすのでなく。おのづから知れる、明かになるの意である。田中氏の解も少しく適切ではない。これも參考として書いて置く。

なほ坂口多藻津氏の『心は涌くとも』説にも贊同し難い。

○

『わくとも』に、現代口語でいふ『分かるとも』の意味のあることは「私鈔」で既に論じた。さうして實朝の歌の場合の『わくとも』を反(そむ)くともとは解したが、矢張りこの歌に、『分かるとも』の意味が潛んで居はしまいかといふ念が予の心の一隅に微かに藏されてゐる。この疑問は今の予にとつては極めて微かなものではあるが、これも參考のために書きとどめて置く。そして藤原定家の作例を「拾遺愚草」から拾つたことがあるから、それをも參考として書きとどめて置く。

秋　情。　雨露に木の葉を何の哀とてなき心地する　こころわくらむ
水鳥知レ主。　見なれては是も名殘や鴛鴦の汝だに宿の主はわきけり
借二人名一戀。　いかにせむ愛名(うきな)を添て卿(かと)つともつらき心の人を分かずば

春、　心あてに分くとも分かじ梅の花散交ふ里の春の淡雪

此等の歌の中の『わく』は四段活用の動詞（第四の歌の分くともは下二段か）で、分かる。明かになる。知れるの意である。分離する。區別するの意から轉じたものである。第四の歌の、『分くとも』は加行下二段活用の動詞で、『分けるとも』の意であつて、直接實朝の歌に應用が出來ない。

霞とも花とも分かず菅原や伏見のさとの春のあけぼの

君といへば落つる涙に昏されて戀しつらしとわくかたもなし

蟲の音に果かなき露の結ぼほれ所も分かぬ秋のゆふぐれ

行秋の時雨も果てぬ夕まぐれ何に分くべき形見なるらむ

何とこの見るとも分かぬ幻によそのなきの千重まさるらむ

とき分かぬ篠の竹の色にしも秋のあはれの深く見ゆらむ

障らずば今宵ぞ君を頼むべき袖には雨の時分かねども

里わかぬ月をば色に紛へつゝ四方のあらしに匂ふ梅が枝

物ごとに時雨の分きし松のいろを一つに染むる夏の雨かな

日はおそし心はいざや時わかで春か秋かの入相の鐘

木葉ちる板間の月の曇らずば變る時雨をいかに分かまし

いつはとは分かぬ常盤の山人も空におどろく月の影かな

初霜よ汝のみときは分き顏に人は數へぬ秋のくれかは

此等の歌の、『わく』は分離する、區別するの轉で、分かるの意である。加行四段の『わく』は矢張り『わける』の意にも用ゐてゐる事は此等の歌を見ても分かる。そのほかに、『分けなれぬ。わかるべき。分くる山風。春は分けとや。分けゆけば。笹分くる庵の。みなわ分かるゝ。分けてや冬の來つらむ。分けつる野べに。分けて傳ふる幻』などの用例があるが、これは活用が別である。

○

勅撰集に選ばれた實朝の歌は、續後撰集十三首、新勅撰集廿五首、續拾遺集

五首、續古今集七首、新後撰集六首、續千載集二首、續後拾遺集四首、風雅集七首。新續古今集四首、新後拾遺集二首、新千載集三首、新拾遺集二首、玉葉集十一首である。當時の歌人が、縱ひ一首でも勅撰集に選ばれるのを非常の光榮としたること、薩摩守忠度が兵馬匆忙の際に「千載集」の選者藤原俊成に百首詠卷を托して死後の榮を希求した如き、鴨長明が一首「千載集」に選ばれて生前の榮譽としたる如きを以て知ることが出來る。然るに實朝の歌は、「新勅撰集」の廿五首を首として合計九十一首が選ばれてゐる。

○

實朝は何故本歌を有つてゐる歌を多く詠んだか。それを平氣でゐたかの點に就いては、「私鈔」中で少しく說を云つたが、なほ少しく書いておく。本歌取は當時歌壇の一つの習慣である。定家は實朝に訓へて、『ふるきをこひねがふによりて、むかしの歌の言葉を、あらためよみかへるを、すなはち本歌とすと申す

也』と云つてゐる。さうして、清輔の『君來ずば獨や寢なむ笹の葉のみ山もそよに騷ぐ霜夜を』『難波人すくもたく火の下こがれ上はつれなき我身なりけり』や、基俊の、『あたら夜を伊勢の濱荻折敷ていも戀しらに見つる月かな』の歌を書いて、『かやうの歌を本歌にとりて、新しき歌に詠めるが誠によろしく聞ゆる姿に侍る也。是より多く取れば我が詠みたる歌とは見えず、もとのまゝに見ゆるなり』（近代秀歌）などと云つてゐる。つまり、他人の作物を借りてもよいが、目立たないやうにするがよいといふのである。なほ、「毎月抄」にも、『本歌とり侍やうは』といつて、『本歌の詞をあまりおほくとる事は有まじきにて候。其中に詮と覺ゆる詞二ばかりとりて、その歌の上下の句にわかちおくべきにや』と說明し、「詠歌大概」にても、『於二古人歌一多以二其同詞一詠レ之已爲二流例一。但取二古歌一詠二新歌一事、五句中及二三句一者頗過分無二珍氣一。二句之上二三字取レ之。猶案レ之以二同事一詠二古歌一頗無念歟』などいつてゐる。そのほかの歌學書にも、『本歌取』

の事が必ず書いてある。順德院の「八雲御抄」に、『古歌をとる事』と題してあるのも卽ちこれである。由來、本歌取はすでに萬葉にも古今にもある事であり、大正の現代でもなかなか多いのである。ただ、實朝の時代には、それが著しい現象となり、大つぴらになつたといふのであつて、實朝の歌に本歌の多いのは此時代の歌壇の一つのおもかげを示すものである。

○

實朝がなぜ「萬葉」ぶりの歌を作るに到つたかに就いては、彼に先天的に優れた素質があつて、「萬葉」の歌の心を理會し得た爲めであると說いた。そのほか武家政治の時代を背景としてゐたこと、京都歌壇の刺戟競爭の渦中にゐないが爲めに、おのづから自己の好む道に向つて進み得たこと。征夷大將軍でありながら、赤木桁平氏のいはゆる『寂しき人』であつたことなど、考に這入つてくる可能要約が幾つかあるが、それらは既に人も說いてゐる。

玆て一つ書いて置きたいのは、實朝が幾らいゝ氣稟をもつてゐても、目ざめ得るには一つの機緣を要したといふ事である。「萬葉集」は當時の歌人間にも、本邦古典の重寶として映じてゐた。また、天曆の五歌仙以來「萬葉」の研究は漸々その步を進めてゐたのみならず、作歌に際して、「萬葉」中の歌詞を取つたり、調にならつたりして、それを或程度まで一種のほこりとしてゐたに相違ない。そして此は鎌倉時代の文學に古事典例を重んずるペダンチッシュの分子があつて、それが特徵の一つをなしてゐるといふ事が、一つの有力な武器であつたのにも因しには古事來歷を知つてゐるといふ事が、また歌合などの時の辯難してゐる。すでに、「曾丹集」のなかには、萬葉集の詞を取つて作つた歌が可なりあるのである。「後鳥羽院御口傳」に、『和歌を學問して、種々の難儀どもをさたして、才學をわかつことは人によるべし。よのつねには、ただ萬葉集ばかりよみたるやうを心得ておくべし、さほどの事も用なしとてさたせねば、人の萬葉

集の言葉をとりて詠じたる歌を得讀まぬなり。それは無下の事にて有時に文字のうへばかりをよみすゑんため、一反人にも問きくべきなり。』とあるなど、また、順德院御撰の「八雲御抄」のところどころに、『萬葉には』『萬葉にも』などあり、『凡歌の子細を深く知らんには萬葉集に過ぎたるものあるべからず』などはこれを證してゐる。また一方に於て、『唯よくよく古歌を見學して、さる物からしりがほに古き受けられぬ詞を好みよむべからず』（八雲御抄）や、『萬葉集はげに代もあがり人の心もさえて今の世に學ぶとも更に及ぶべからず。初心の時ものづから古體を好む事あるべからず』（藤原定家 毎月抄）などと制してゐるところを見ると、低級な歌人の間にも、「萬葉」の詞などを採つて變な歌を作るものがあつたことを證するものである。もつて當時の歌人の萬葉集に對した態度が分かるのである。かういふ事が、書きものとして、或は人の話として、實朝の耳に入つたのかも知れない。そして、さういふ歌道の重寶があるならば、是非欲しいと思つ

たのである。そして雅經を介して定家に尋ねたのである。定家が相傳私本の萬葉集一部を實朝に贈つた。實朝廿二歳の十一月である。予の機緣と謂つたのは當時の歌人の『萬葉集尊重』を實朝が知つたのを指すのである。

次ぎに、此は既に論じたが、定家が、實朝に向つて古歌を學べと敎へたことである。『言葉は古きをしたひ』と云ひ、『しかれども大納言經信卿、俊朝朝臣、左京大夫顯輔卿、清輔朝臣、近くは亡父卿、卽此みちを習侍ける基俊と申ける人、此ともがら、末の世のいやしき姿を離れて、つねに古きをこひねがへり。此人々の思ひ入て、すがた勝れたる歌は、高き世にも及てや侍らむ』（近代秀歌）と訓へて居る。實朝にはいい素質があつた。又境遇が特殊のものであつた。然も實朝が萬葉ぶりの歌を作るに至つたに就ては、縱ひ、定家の『古きをしたひ』は三代集を出でなかつたとしても、定家の功の甚だ大きいのを知る。また、新古今集を以て代表せられた歌壇にも、幾つかの潛流があつて、それがやうやく尊い

天稟をもつてゐた實朝に至つて、白日下をながるゝ大河の相を示しはじめたとも觀るべきである。

○

定家が實朝の歌を褒めて、『鎌倉の右府ぞたけたる歌人とおぼえはべる』といつたのは、彼の歌風から考察して少し阿諛の分子があると予は說いた。次いでその稱讃の詞も阿諛ではなく、『兎に角定家は實朝の歌を邪念なき心から褒めて居たと見るのが正當ではあるまいか』と訂正した。この說に尙ほ少許の內容を與へたいと思ふ。定家は幽玄とか有心とか云つて、『さても此十躰の中にいづれも（いづれと申共）、有心躰に過て歌の本意と存ぜる姿は侍らず』（毎月抄）のごとく、彼の本領はここにあつて、あのやうな細々しい綺麗な歌を作つたが、一代の宗匠として人に訓へた態度は、なかなか博大な心を示さうとしてゐる。自分の歌風に合はない者はびしびし難駁したといふよりも寧ろ宗匠としての彼は、

歌の鑑賞者は決して偏狹であつてはならない、單に自己の好むところに執してはならないと說いてゐる。そこで彼は純萬葉調の實朝の歌をも褒め得たのである。縱しんば表面的であつたにせよ彼の博大心を予は感謝するのである。

定家はかう云つてゐる。『先にしるし申候にし十體をば、人の趣をみてさづくべきにて候。器量も器量ならぬも、うけたる其體侍るべし。或は幽玄體をうけたらん人に拉鬼體をよめとをしへ、又長高樣を得たる輩に濃體をよめとをしへん事、何かよかるべき。只佛の說たまへるあまたの御法も、衆生の機にあたへたまへるとかや。それにすこしもたがふべからず。我このむやうにうけたるすがたなればとて、此體をよめと得ざらん人に敎へ候はん事、かへすがへす道の魔障にて候べし。其人のよめらん歌をよくよく見したためて後に風體をさづくべきにて候。いづれの體をよまんにも、なほくただしき事は、わたりて心にかくべきにこそ。さればとて又其一體に入ふして餘體を棄てよとには候はず。得た

る體を地盤として正位に詠みすゑて、さて餘の體をよまんはくるしう候まじ。ただ正路を忘れてあらぬ方に趣くをつゝしむべき事とぞ覺侍る。いまの世にもかたをならべて互に達者の思ひをなしたる輩も、多分このおもむきを辨へかねて、ただわがよむやうを學べとのみ敎ふること、無下の道しらぬにて侍るべし若われより越えて物をも高く案じすぐれたる姿を天骨とよまん人のあらんに、かやうに抗折(提撕)せては何かよろしく侍るべき。俊頼朝臣・清輔朝臣などの「庭訓抄」にも此よしをよく申ためりとぞ見え侍る。邪に趣くところをぞ、いかにもまもり訓ふべきにて候。』(毎月抄)つまり、歌の鑑賞者、歌の敎育者は、博大の心を持し、決して偏執てあつてはならぬ事を說いたのである。「毎月抄」は承久元年七月に書かれたものとせば、直接實朝に云つたのではないが(衣笠内府に贈つたもの)、もつて彼が實朝の歌を褒め、新勅撰集に二十五首を採つた、彼の心境を解明することが出來るとおもふ。

附記。ここに引用した「毎月抄」の文は、佐佐木博士が宮内省圖書寮本によつて校正せられた書物を博士から拜借して寫取つたのであるが、博士の著「日本歌學史」第八三頁引用の文と少しくちがふところがある。同書を參看せられんことをのぞむ。

○

定家は、「新勅撰集」に實朝の作廿五首を選んだ。そして、その「新勅撰集」は、越部禪尼から非難されたほかに、當代の人々からも、引いて後代の人々からも、彼此といはれて、「後拾遺集」に「小鯵集」といふ異名が付いたやうなことがなかつたまでも、いろいろ不平流言があつたことてあらう。「增鏡」にさへ『心よからぬ事などさゝめく人もはべりけるとかや』などとある。定家の選んだ實朝の歌を一覽するのは興味ふかい。

(1) 彦星のゆきあひをまつ久方の天の河原にあき風ぞ吹く
(2) み冬つき春し來ぬれば青柳のかつらぎ山に霞たなびく
(3) 春きては花とかみえんおのづから朽木のそまにふれる白雪

(4) このねぬる朝けの風にかをるなり軒端の梅の春のはつ花
(5) 櫻花ちらば惜しけむ玉ぼこの道ゆきぶりに折てかざさむ
(6) 玉もかる井手のしがらみ春かけて咲くや川瀬の山吹のはな
(7) 夕されば衣手涼し高まとのをのへの宮の秋のはつ風
(8) 故郷のもとあらの小萩いたづらに見る人なしみ咲きか散るらん
(9) 路のべの小野の夕霧たちかへり見てこそゆかめ秋萩のはな
(10) 和田の原八重の鹽路にとぶ雁の翅のなみに秋風ぞふく
(11) 雲のゐる峰はるかに霧こめてたかしの山に鹿ぞ鳴くなる
(12) 思ひ出でゝ昔を忍ぶ袖の上にありしにもあらぬ月ぞやどれる
(13) 淺茅原ぬしなき宿の庭の面にあはれいくよの月はすみけん
(14) ぬれてをる袖の月影ふけにけりまがきの菊の花の上のつゆ
(15) 雁なきて寒きあさけの霜に矢野の神山いろづきにけり
(16) 風寒み夜の深けゆけばいもが島かたみの浦に千鳥なくなり
(17) 山たかみあけはなれゆく横雲のたえまに見ゆる嶺のしら雪

(18) 武士のやそうぢ川を行くみづのながれて早き年の暮かな
(19) しらま弓いそべの山の松の色のときはに物をおもふころかな
(20) わが戀はあはでふる野の小篠原いくよまてとか霜のおくらん
(21) さむしろに露のはかなくおきていなば曉ごとに消えやわたらん
(22) 世の中は常にもがもな渚こぐ海士の小舟の綱手かなしも
(23) 山はさけ海はあせなん世なりとも君にふた心我あらめやも
(24) 思ひ出てよるはすがらに音をぞなくありし昔の世々のふるごと
(25) 世にふればうきことのはのかずごとにたえず涙の露ぞおきける

これらの歌を見ると、大體に於て、新古今調のものと、萬葉調のものと、二とほりになる。萬葉調といつても矢張り當時歌壇の色調を交へてゐるが、歌は大柄(おほがら)で豐かである。調の高い、當時に於いては所謂長高樣の一種と看做すべきものであらう。この萬葉調のものは實朝にとつて比較的晩年の作であるのは無論であつて、それを定家が選んでゐるのであるから、「愚秘抄」中の定家の實朝

に對した評言を、後人假託の筆として除去しても、なほ定家が實朝の歌をさう輕蔑してゐなかつたことがわかる。「新勅撰集」に三上皇の御製のないのは無論不當である。しかし其が阿諛して實朝の歌を選んだ證とはならぬのである。『定家、はゞ松のとしつもり、かは竹のよゝにつかうまつりて、なゝそぢのよはひにすぎ、ふたしなのくらゐをきはめて云々』（新勅選和歌集の序）といひて、貞永元年十月にこの序と目錄とを奏上し、文暦元年五月、七十三歳のとき、「新勅撰集」（草本）を奏覽し、數月を經て、八月七日、勅撰の草案を南座で燒いたあたり（明月記に云。勅撰愚草廿卷、纔置二南庭一燒レ之已爲二灰燼一奉レ勅未レ調二卷軸一以前、遭二如レ此事一更無二前蹤一無二冥助一無二機緣一之條、已以露顯、徒可レ蒙二誹謗罵辱一置而無レ詮者也。）の感慨を想像すると、彼の心に邪念などさうあらうとは思へない。予が改めて、實朝の歌を選んだにつき邪念云々のことを否定したのはこれがためである。しかしいよいよとなれば矢張り定家は自ら作つた歌境に落著くのである。眞淵の、『よはひ七十路に餘れれば、思へど得こそ自ら改むるに日のなかりけめ』（金槐集附言。これは貞享本の附言より引用したのであつて、「賀茂翁家集」收のものと少しく違ふ事を注意す）どころではなく、定家は實朝を目して自分の競爭者とはしなかつたのである。定家の實朝の歌に對した考は如是であるが、大正の現代にて萬葉集の歌を尊ぶと公言しながら、萬葉に學ぶのは其の精神であつて外形ではない。などといつてゐる不徹底なともがらよりも、定家の考が數段進歩してゐることを覺悟せねばならぬ。

附記。「歴代和歌勅撰考」のなかに、『契沖薙勅撰云。……右の消息（越部禪尼消息を指す）の中に御所たちとあるは、後鳥羽院・土御門院・順德院・この三院の御製を入られざるをいへり。しかれども若天氣御許容なかりけるか、關東のはからひか、此事定家卿本意ならざりけるにや。百人一首の終に後鳥羽院、順德院ふたりの帝のありがたき述懷の御歌を載せられたり。爲家卿「續後撰集」に二首ながら入れられたるは父の卿の心ざしを補はれけるか、もしは云ひのこされけるか。』とある。けれども、この辯護說を否定するものが多い。

「百練抄」のなかに、『文暦元年十一月九日甲辰、中納言入道於二南關白家一彼覽二新勅選一（先院御時被二

奏覽こ）兩殿下監臨有ニ用捨一彼レ切ニ弃百首一云々、又有ニ被レ入之人一云々。』これも何かを暗指すると思つて書く。

○

實朝の歌の眞價を見るには、全體を通じてその本領を見ることを要する。その本領は決して、『涙こそゆくへも知らぬみわの崎さのゝわたりの雨の夕ぐれ』などにあるのではない。然るにかういふ模倣の歌、時樣を出てない歌、題詠の歌が、「金槐集」の過半を占めてゐるのである。さういふ歌のみを遺して實朝が若し死んで仕舞つてゐたら、予は到底實朝を論じようとはしないのである。然るに實朝には目ざめた以降の優秀な歌がある。なほ實朝が若し廿八歳で死なゝかつたならばといつて假定說も成立つ。此は、詩人を論ずるに當つては是非とも事實だけを據處としなくもよいからである。若し『極めて此公の心ならねば捨つべし』と眞淵がいつたやうな其等の初期の歌も、『汚れたる物を皆はらへすて

て清き瀨に身そぎしたらむ如くなる』と眞淵が評した晩年の歌も、平等に勘定に入れて、初期の平凡歌を以て實朝を非難する材料にするやうな人があつたらさういふ人は實朝の歌などを論じない方がよいのである。

しかし、予が「金槐集私鈔」で選評した歌は、盡く晩年の作といふのではない。初期の作もあらう。中期の作もある。そして、本歌を有つてゐること、「私鈔」中で論じた如くである。『霰たばしる那須のしの原』の本歌は、定家の『霰たばしる野べのさゝ原』であるとも云ひ得るほどである。然かも予は大體として實朝の歌の本領を逃がすまいとしたのである。卽ち縱ひ初期の歌中期の歌であつても、予の好む歌は實朝の歌の本領だと信じたからである。

初期の作・中期の作・晩年の作と別けると謂つても、その間に截然たる區劃があるのでなく、また多くの移行型と除外型が存してゐるのである。人の爲事はさう進歩するものではなく、またさう豹變するものでもない。實朝の歌は進步

と變化の著しい方であるが、それでも十年間ぐらゐでさう進歩するものでない事を證してゐる。編年體でない「金槐集」から、初期・中期・晩年の作だといつて抄するのは困難であるが、予は試みにそれを行ふのである。そのうち、初期中期の作とおもふものは、盡く「私鈔」中に收めなかつたものを採錄する。

さくら花さくと見しまに散りにけり夢かうつゝか春の山風
さくら花咲きてむなしく散りにけり吉野の山はよし春の風
乳房すふまだいとけなき絲子のともに泣きぬる年の暮かな
月影のしろきを見ればかさゝぎのわたせる橋に霜や置けん
さ夜ふけて雲まの月の影見れば袖にしられぬ霜ぞ置ける
ながむれば衣手かすむ久方の月の都の春の夜のそら
春は來て雪は消えにし木のもとに白くも花の散りつもるかな
春ふかみ嵐の山のさくら花咲くと見しまに散りにけるかな

これらの歌は極めて初期の作だと推測する。歌を作つて見ようといふ氣になり、從臣の歌つくるものなどからいろいろ助言を得、先輩の作に倣つて、心持も手法もいかにも和歌らしく、何か一わたりの事をいはねば和歌にならないやうな氣がして、心もちを一捻して、これが和歌らしいと考へた時代であらう。『夢か現か春の山風』『吉野の山はよし春の風』『月の都の春の夜の空』などが卽ちその事を證して居る。さうして、本歌取をやるにしても、『袖にしられぬ霜』といふやうなところだけに心の焦點があつたのである。それでも最後の二首の如きは下手ではあるが、素朴なところがあつて可哀らしい。これらは十六七歳ごろの時の作ではあるまいか。かういふ歌までも材料にして實朝の歌を非難しようとするのは無理である。

梅が枝にこほれる霜やとけぬらむほしあへぬ露の花にこほれる
ふけにけり外山のあらしさえきえてとをちの里にすめる月かげ
おく山のたつ木もしらぬ君により我心からまよふべらなり

岩くぐる水にや秋の立田川河風すずし夏のゆふぐれ

きのふまで花の散るをぞ惜しみこし夢かうつつか夏も暮にけり

ゆかしくは行てもみませゆき島のいはほにおふる撫子のはな

さ夜ふけて蓮のうき葉の露の上に玉と見るまでやどる月影

をしむとも今宵あけなば明日よりは花の袂をぬぎやかへさむ

住吉の松の木がくれ行く月のおぼろに霞む春の夜のそら

誰すみて誰ながむらん故郷の吉野の宮の春の夜のつき

これらの歌になると前のよりも少しく進んでゐる。先輩の作物を見る目も少しく肥えて來てゐるし、手法の捻ねり方も巧みになつて來てゐる。初句に『ふけにけり』などと置く當時の流行手法をおぼえて心中に得意であつたのだかも知れぬ。『おく山の立つ木も知らぬ君』などの言掛することをおぼえて嬉しがつたのだかも知れぬ。かういふ幼稚な下級な作が「金槐集」にあることを世人が餘り知らない。それは「金槐集」を讀まぬからである。そして實朝の歌といへ

ば、『霰たばしる那須のしの原』とか、『沖の小島に波の寄る見ゆ』とかぐらゐのものだとしてゐる。そして偶々「金槐集」を讀んで、かういふ歌に逢著すると反豫期の心から出發して、「金槐集」の大部分は、囚はれたる歌、歌の爲めの歌である。そこで歌人としての實朝の價値は小さいといふ結論をなすに至る。これはさういふ論者にとつて恐るべき鑑賞眼力の錯誤であると予は思ふ。

雁がねの歸るつばさにかをるなり花をちらむる春の山かぜ

思ひいでて昔を忍ぶ袖の上にありしにもあらぬ月ぞ宿れる

むかし思ふ秋の寐覺の床の上にほのかに通ふ峰の松かぜ

大かたに物思ふとしもなかりけりただ我ためのの秋の夕ぐれ

さ夜ふけて雁の翅におく霜の消えても物は思ふかぎりを

難波がたこぎいづる舟のめもはるに霞に消えてかへる雁がね

故郷のあさぢが露にむすぼほれ鶯り鳴く蟲の人を怨むる

いにしへを忍ぶとなしにふる里の夕べの雨ににほふたちばな

春雨の露のやどりを吹く風にこぼれてにほふ山吹のはな

我が宿の八重の山吹露をおもみ打はらふ袖のそぼちぬるかな

かういふ綺麗な巧みらしい歌もある。「新古今集」の大部分の歌を讀み味はひさうして定家に歌を送つて定家の添削を信じ切つてゐたごろの作と思はれる。『郭公待つ夜ながらの五月雨に』などの歌もあるが、此などは定家の歌の模倣て、この時分には、自らの作を省るのに常に當時の歌人だちの作物のみを對象としてゐたものゝやうである。それゆゑ此等の歌は盡く當時の歌、遠く溯つたところで三代集を出でないところの歌に交渉をもつてゐるのである。さうして彼等の歌に比べてもさう見劣りのしないものであることが分かる。概論に於て純眞直截の歌を唱道しながら、いよいよとなれば「古今集」を宗とした香川景樹が、實朝の歌を評して、『ことごとく古調をかすめ』などと謂つたのは、いかに彼が「金槐集」に對して無智であつたかを暴露するものであつて、然かも得

得として長生したのは、予に一つのをしへを與へるものである。

あしのやのなだの鹽やき我なれやよるはすがらにくゆりわぶらん

和田の原八重の鹽路にとぶ雁の翅のなみに秋風ぞふく

ながれ行く木の葉のよどむえにしあれば暮れての後も秋は久しき

ふらぬ夜もふる夜もまがふ時雨かな木の葉の後の嶺の松風

わくらはに行きても見しがさめが井のふるき清水にやどる月かげ

秋田もるいほに片しく我袖に消あへぬ露のいくよおきけむ

藻鹽やくあまのたく火のほのかにも我思ふ人を見るよしもがな

今さらにわが名はたたじかはらやのしたしく烟くゆりわぶとも

行く春のかたみと思ふにあまつ空有明の月は影もたけにき

立かへり見れどもあかず山吹の花散るきしの春の川なみ

稍後期の作も交つてゐると思はれるが、心の動きも細かく氣が利いて來てゐる。表はしかたも凝つたものがある。しかしかうした歌であつても實朝の歌は

定家の歌などに比して意味が分かり易い。同じく幽玄體有心體の教育は受けても、彼の氣稟はおのづから謎のやうなところには止まつて居なかつたのである。これを予は最初ぞんざい、平氣の爲めだと思つたが、さうでなく、おなじく定家らの言つてゐる『思ひ澄ます』のであつても、謎のやうな境でなく明徹の境に落著くべき氣稟を有つてゐたのである。一見『ぞんざい』に見える初期の作のあるのは、寧ろ晩年の遒勁流轉の作を生むべき理由の解明として役立つのである。

玉くしげ箱根のみうみけゝれあれや二くにかけて中にたゆたふ
旅を行きし跡の宿守おれおれに私あれや今朝いまだ來ぬ
大海の磯もとどろに寄する波われてくだけてさけて散るかも
箱根路をわが越えくれば伊豆の海や沖の小島に浪の寄る見ゆ
やらの崎月かげ寒しおきつ鳥かもといふ鳥うき寐すらしも
敵のこる岸の山吹春ふかみ此一枝をあはれといはむ

春過ぎて幾日もあらねど我やどの池の藤なみうつろひにけり
ふく風の涼しくもあるかおのづから山の蟬なきて秋は來にけり
世中は常にもがもな渚こぐあまの小舟の綱手かなしも
ものいはぬ四方のけだものすらだにも哀なるかなや親の子をおもふ
大君の勅をかしこみ父母に心はわくともひとにいはめやも
ひむがしの國に我をれば朝日さす波姑射の山のかげとなりにき
山は裂け海はあせなむ世なりとも君に二心われあらめやも

これらの歌をば晩年の作として考へてゐる。ことごとく念々の動きに順ふ遒勁流轉の作ならぬはない。これらを上に記して來た初期の歌に比較したならば全く別人の作の觀をなすことが分かる。みづから目ざむることの難く、進歩のおそきを歎ずるものは、現世に於ても予一人ではあるまい。さうして實朝の進歩のあとを見るに及んで、その前におのづから首のくだるものは予一人ではあるまい。『春待ちて霞の袖にかさねよとしもの衣をおきてこそゆけ』といふ歌に

は、『建保五年十二月方違の爲に永福寺の僧坊に罷りて歸り侍るとて小袖を殘し置きて』といふ詞書があり、「東鑑」建保五年十二月廿六日の條に此事が書かれてあるから、此は實朝廿六歳の時の作である。又『戀しともおもはでいかが久かたのあまてる神も空に知るらん』といふ歌には、『建保六年十一月素還法師于時胤行下總國に侍りし比のぼるべきよし申し遣はすとて』といふ詞書があり、「東鑑」建保六年十一月廿七日の條に此事が書かれてあるから、此は實朝廿七歳の時で然かも死する約二ヶ月前の作である。また、『磯の松いくひささにか成りぬらむいたく木だかき風の音かな』には、『三浦といふ所へまかれりし道に磯邊の松としふりにけるを見てよめる』といふ詞書があり。それを「東鑑」の記事に據つて考へるのに、此は十九歳の時の作ではなく廿六歳の時の作だと想像するこれらによつてみるに、實朝の晩年の作にも、時代の風潮の混じてゐるものがある。これは移行型の一つと考へてもよい。歌でもさう豹變が出來ないもので

あるからである。或はさう考へずに、その時代を背景とした自己が、いかに歌の上に表はれて行つたかをおもふのも亦予にとつて大切なことである。

○

實朝の作つた戀歌を讀んでゐると、巧みな表はし方の歌に出會ふ。さうして序歌が極めて多いのに氣がつく。これは「萬葉集」以來の慣用手段であるから少しも不思議ではないが、實朝作の一つに、『わたつみにながれいでたるしかま川』といふ序歌がある。これも本歌があるかどうか分からないが、兎に角寫生の句である事が特徴である。予はこれを實朝の造句だと思つてゐる。左に中期後期作の戀歌をとりまぜて幾つか書いておく。

わたつみにながれいでたるしかま川しかもたえずや戀渡りなん

むこのうらの入江のすどり朝な朝なつねに見まくのほしき君かな

田子のうらの荒磯の玉藻波の上にうきてたゆたふ戀もするかな

我戀はかこのわたりの網手繩たゆたふ心やむときもなし

秋の野に朝ぎりかくれなく鹿のほのかにのみやきゝ渡りなむ

雲がくれ鳴きて行くなる初雁のはつかに見ても人は戀しき

みしま江や玉江のまこもみがくれて目にし見えねばかる人もなし

五月やま木の下やみのくらければおのれまどひてなく郭公

人しれず思へばくるしたけくまの待つとは待たじ待てばすべなし

神山の山下水のわきかへりいはでもの思ふ我ぞ悲しき

山川の瀨々の岩波わきかへりおのれひとりや身をくだくらむ

岩ばしる山下たぎつ山川の心くだけて戀やわたらむ

○

「金塊集」で予の好きな歌はたいてい「私鈔」中に選拔したが、ここに補遺としてなほ少しく選んでおく。これらの歌は大して優れた作といふのではない。ただ實朝の歌をもつと精しく論じようとするときに幾分の參考にならうかと思ふのである。またこれらの歌は、中期の作も晩年の作も交つてゐるやうである

我宿のませのはゝそに(ほたに)はふ瓜のなりもならずも二人ねなまし

みなと風いたくな吹きそしながどりゐなのみづうみ舟とむるまで

東路の道の冬草枯れにけり夜な夜な霜やおきまさるらむ

みさごゐる磯邊にたてるむろの木の枝もとをゝに雪ぞつもれる

草枕旅にしあればこひさむるまをなみ夢さへ見えず

草枕旅にしあればかりごもの思ひみだれていこそねられね

さとみこがみ湯たでざゝのそよそよになびきおきふしよしや世の中

大日の種子よりいでてさまや數さまやきやう又尊形となる

宮柱ふとしき(ふとしく)立てて萬代に今ぞさかえん鎌倉の里

ぬば玉のやみのくらきにあま雲のやへ雲がくれ雁ぞ鳴くなる

泉川はゝその杜になく蟬のこゑのすめるは夏のふかきかな

きほ山のはゝそのもみぢ千々の色にうつろふ秋は時雨ふりけり

八百萬四方の神たちあつまれり高天が原にきき(きち)たかくして

き月やみ神なび山の時鳥つまごひすらし鳴音かなしも
五月やみさ夜ふけぬらし時鳥神なび山におのがつまよぶ
時鳥かならず待つとなけれども夜な夜な日をもさましつるかな
山ちかく家ゐしをれば時鳥なく初聲を我のみぞきく
あをによしならの山なる呼子鳥いたくな啼きそ君もこなくに
高まとのをのへのきぎす朝な朝なつまに戀ひつゝ鳴音かなしも
おのがつまとひわびにけり春の野にあさる雉子の朝な朝な鳴く

右の歌のうち、『さとみこ』は『里巫女』である。『みゆたてざさ』は、『御湯立笹』て、巫女が神前で熱湯に笹の葉を浸してそれを自身にかける、その行をなすとき神託を得るといふのである。第一二句は序であつて、笹の事が主である。『大日の種子より出でて』の歌には、『得功德歌』といふ題があるが、予には眞の解釋が出來ない。願はくは先輩の指教をまつ。ここには少しばかり書いておく。諸尊には『種子』がある。これは今ても梵字であらはして居る。ここは、

大日如來の種子から出てゝ、卽ち大日如來の功德によつてなどの意かも知れない。『さまや敎』は、『三昧耶形』のつもりのところを後人が思違ひて寫したものであらう。『三昧耶形』は各諸尊に固有の印相のあるのを謂ふのであつて、いはば各諸尊本誓の象徵である。例へば阿彌陀佛は蓮華若くは初割の蓮華を持つてゐる。その蓮華は阿彌陀佛の三昧耶形である。また地藏尊の三昧耶形は錫杖とか蓮華とか寶幢などである。此歌は、種子から三昧耶形となり、いよいよ功德を得て、つひに尊形と成るといふことであらうと思ふ。さうして、『ぺ於四字合成の風吹けば霧雲はれて彌陀ぞあらはる』などと似た意味の歌であらうと思ふ。『八百萬四方の神だち集れり』の歌の結句の『きき』は、『ちき』の方がよいやうである。『ちき』は『千木』て、祝詞の、『高天原爾千木高知氐』あたりから由來してゐるらしいのである。

○

賀茂眞淵の極力實朝を稱揚したことは既に書いた。その眞淵の言説に根本の異見を有つた香川景樹の説の如きはもはや齒牙にだも懸くるの要なきもてある。ここに同じく實朝を尊敬しながら、眞淵の實朝評を標準として、眞淵は實朝を褒め過ぎてゐるといふ説と、まだ褒め足りないといふ説とある。佐佐木博士は實朝を稱揚し、そして眞淵の言に對して、『眞淵の評も己が好むところにおもねりたる嫌はあり』（金槐集の後に）と云ふ。正岡子規氏も實朝を稱揚し、そして、眞淵の言に對して、『眞淵は力を極て實朝をほめた人なれども、眞淵のほめ方はまだ足らぬやうに存候。眞淵は實朝の歌の妙味の半面を知りて他の半面を知らざりし故に可有之候』（歌よみに與ふる書）。と云つてゐる。ここに於て、おなじく實朝を稱揚しても、兩者の間に量に於て大分の距離が生じてくる。予の先師は、「金槐集私鈔」が雜誌「アララキ」に出て居る時分に、予の評言を讀まれて、『八大龍王』の歌を餘り讃め過ぎたと云つた。先師は晩年に『叫びの歌』を唱へたとき、それて

も、『實朝卿の歌には不思議に「叫び」の含まれた歌がある。それも何十首といふ程は無論ないけれども凡だが二十首ぐらゐはあるだらうと思ふ。』といひ、『物いはぬ』『山はさけ』の歌をあげて、『此二首などは何人にも解るべき「叫びの歌」である。自然を歌つた歌にも叫びの含まれた歌は隨分ある』と云つてゐる（アラ、ギ六の二）今人も、予の實朝に對した評言が、或は過讃であつて、己が好むところに執し過ぎたといはれるかも知れぬ。しかし現在の予は、己が好む一途を行かんより途はない。さうして藝術道は究竟に於て一途である。念々燃えて歩まむ途はただ一つだと思ふのである。一たび實朝に對した予は、遠離して冷めたくこれを見放つことは否であつたのである。冷眼もちて予を見むものはしばらく惜く。いささかたりとも予の生を認めむひとびとは、予が念々の燃ゆるのをゆるしたまへと思つてゐる。

○

「金槐集」は、實朝在世中に出來たものか、歿後に誰かが輯したものか、その命名も何時ごろで誰が爲したものか、寡聞の予は未だこれを知らない。そこてひそかに想像するに、歌集は實朝在世中から略出來てゐて、歌が出來るに從つて增補して行つたのだかも知れない。それは實朝自身でせずに、仲章かそのほかの從臣がしたのかも知れない。命名も實朝在世中に定まつてゐて、從臣中の學者か、或は京都の公卿あたり、恐らくは鎌倉にゐた學者が付けたのであらう。太上天皇御書下預時の一首が「增鏡」には『いかなる時にかありけむかくよみける』とあり。群書類從本の「金槐集」には、『太上天皇御書下預時歌』が一番しまひに書いてあるのから想像すると、彼の三首は長らく知れずにゐたのてはあるまいかと說く人（鶴陰居士）もあるが、新勅撰集には『山はさけ海はあせなん世なりとも』の歌が選ばれてゐるから、さうでないことが分かる。又「增鏡」の『いかなるときにかありけむ』といふのも、「增鏡」の著者の筆の綾であるか、或は

知らなかつたせゐてあらう。勅撰集は、先づ歌人に勅して歌を獻ぜしめ、（「兼載雜談」に『新古今撰せられし時、公卿諸大夫以下家集を五百首千首づゝ出されしに鴨長明はただ十二首したりしに云々。』）百首の披講を行つて、それから始めて撰集に從事するのであるが、「新勅撰」を撰ぶ頃は、略纒つた「金槐集」の寫が、師匠であつた定家の手元にあつたと見ても不當てはあるまい。貞享本の柳營亞槐奥書の『右之一帖者鎌倉右大臣家集京極中納言門弟此道之達者云々。然最初雖二部類一不審尙之間重而改レ之畢。尤可レ爲二證本一者乎』をも考へて見たい。此項全くの想像である。

○

實朝の和歌を觀るには、その先天の風骨を以て先づ基底觀を作らねばならぬことを云つた。ついてその機緣となつたものを觀ねばならぬことも云つた。進んて時代の氣運の大體を觀てもよいと思ふ。時代は平安の末期から鎌倉の初頭

に移つたときてある。源平の合戰を終結とし、公卿政治が武家政治に移つたときてある。纖巧軟弱の氣風が遒勁豪放の氣風となり、感傷・空想より凝觀・諦相に轉じたときてある。新佛敎がどしどし勃興したときてある。建築に於ていはゆる唐樣式（宋式。禪宗派）が傳來し、繪畫に於てもいはゆる禪派の渡來、繪卷物の發達となり、彫刻に於ても康慶・運慶・快慶・定慶の徒いてて、金剛力士・四天王・五大明王などの動運の形相を示したものに傑作を遺した時代である。ときの女性は政子あたりを起點として質素儉約て貞操堅固を美德とし、ふわふわした夢のやうな女性とはちがふやうにならうとした時である。人々は現世歡樂の夢を打破られて悲痛流轉の現世相に面と對つたときである。以上には多くの除外例あること無論であるが、今は大體を觀んと欲して、除去の論法を採つたのである。當時の和歌は堂上に發達し歌壇の宗匠は生死の渦中に投ずることもなく、また、他の藝術壇の氣運に參與することなどは少なかつたのであらう。若

し假りに實朝が當時の歌壇に居ないとしたなら、當時の歌壇は他の藝術壇に比していかに寂しいかを思はねばならぬ。ひとはさもあれ予は深くさう思ふのである。さうして、時代の氣運は恐ろしいほど大切てあるが、偉大なる個人を待たずに、歌壇の氣運などを作ることは覺束ないと思ふのてある。そして予は、實朝が晩年の作に思到り、短命にして果てた實朝が生の連續に思到つて心悸の亢ぶるを覺ゆるものてある。

○

予が「金槐集私鈔」「源實朝雜記」て、實朝の人格を論じたときは、あれは自說を言つたのてある。文獻は讀んても、實朝の性質などに關しては、二三氏の説を除く外、精しく讀む暇がなく、三浦氏の「鎌倉時代史」は校正が濟んてからはじめて讀んだ。「私鈔」を發行してから、讀んだものゝうちて、實朝の人格に關する說を次に抄出する。その儘抄出するのは著者を尊敬する意味と、予の覺

え帳として役立つ意味と二つある。これらの說には予の說と合致するのもありしないのもあつて興味ふかい。また予の續いて言はんと欲してゐて未だ言はなかつたことが、これらの說のなかにすでに說き盡されてゐるのもある。

○『實朝の性格は今尙史上の一疑問となつて居る。世には文弱な紈袴公子と思ふ人もあるが、實際部下の勇士からもそれと毛嫌せられたことがないでもなかつた。併しさすがに父祖の遺風を承けて、優しい中にも雄々しい所があつて强ち大將の器でなかつたとはいへぬ。それが妙にひねくれた性癖になつてしまつたのは、種々込入つた事情や境遇に依ることではあるが、母の政子や叔父の義時らの不斷の壓迫も、其有力な素因であつたと思ふ。此人には嬖妾が多かつたが（茂吉曰。金槐集私鈔戀歌の部を參看せよ）、子種と申しては一人もなかつた。これは十三の少年で妻擇をする程の早熟でもあつたし、過淫の結果かと思はれぬでもない』（三浦周行氏。丹後局と卿局。明治四十五年十一月稿。歷史と人物所收）

○『實朝の人格は史上の一疑問なり。然るに余を以て

すれば、彼れは資性眞率、華美を好み、同情に富み、頗る貴公子の風あり。彼れが其夫人として卿相の女子を選びたりしも、固より其所なり。彼の嗜好は亦其の性格を現はし、長ずるに及びて最も和歌を嗜み、又蹴鞠を好めり。吾妻鏡に將軍家賞ニ翫諸道一給中、殊叶ニ御意一者、歌鞠の兩藝也と見えたるはこれをいふなり』（三浦周行氏鎌倉時代史）

○『實朝の時より始めて幕府に和歌會の催あり。賭物に華美を競ひ遊女を出すが如き京都式の遊戯も盛に行はれて、自ら風紀の頽廢を免るべからざりしなり。これが爲め、若し御家人間に於て尙武の氣象を鎖磨して遊隋の氣風を馴致し、延いて武家の特色を喪失するに至るあらんか。其影響するところ決して鮮少なりとせじ。これ當時心ある宿老の心を傷ましめしところなり』（鎌倉時代史）

○『實朝は治世の君なり。彼は乃父の如く、櫛風沐雨の苦を嘗めしことなく、奇策縱橫人心を籠絡するの能力に乏し。其の襲職の初、外祖時政の干涉を受け、時政退隱の後も、政子・義時等の爲めに幾度か其自由を拘束せら

れたり。……義時・廣元等の如きも亦常に彼の行動を監視して屢苦言を進め、建保三年の如きは天變に託して頻りに善政を興さんことを獻言せり。顧ふに日常の政務彼の意の如くならざりしもの必ず多かりしならむ。賴家の沒常識的行爲が此種の壓迫に起因せること多きを知らば、世故に疎かりし實朝其人に及ぼせる內的影響の如何はこれを推知するに難からざるべし。況んや彼は多病にして頗る神經質なりしが如きに於てをや』(上同)　○『北條氏の爲め、往々曲筆の嫌を免れざる吾妻鏡に於てすら、彼が政子・義時等に對して一種の反抗的態度に出てたりしこと、自家の運命に對して悲觀的に陷りつゝありしことをば掩はんとして掩ふべからざるものあり。……賴朝が事每に舊舊の意見を徵せしに似ずして、實朝の獨斷專行するを常とせしは、廣元の浩歎せしところなり。惟ふに彼は周圍の事情に顧みて、自家の地位も亦早晩賴家と同一の運命に陷らんことを思ひ、後者と略同一の徑路によりて青年の客氣に驅られ、自制自重の念を棄て

て、時に沒常識の行動を敢てするに至りしならん』(上同)　○建保四年に義時が廣元に賴んで實朝の官途累進に對つて諫めさせた。吾妻鏡の、諫諍之趣尤雖二甘心一、源氏正統縮二此時一畢、子孫敢不レ可レ相二繼之一、然者飽帶二官職一欲レ擧二家名一云々の記事について三浦氏云。『吾妻鏡の他の記事に據れば、實朝の此言は後日の遭難に向つて讖をなさんがため、編者の揑造に成れるやの疑なしとせじ。然るに時恰も實朝が渡宋の計畫に熱中しつゝありしこととて、彼の心的昂奮の意想の外に出でたりと見ゆれば、此際此の如き悲觀的聲言は寧ろ有勝なる事として信をおくを可とせん。』(上同)　○『將軍としての實朝の行動は、政子・義時らの掣肘を受けたるものゝほか、概して其自由意志の表示たりしは、彼の性格、境遇の當さに然るべきところ、これを他の誘惑指導に依るとなすは事實を去ること遠し。』(上同)　○『予の思ふ所によれば、實朝はわが國の歷史上多く類例を見ない複雜の一人格である。彼には祖先已來の血をうけた雄々しい武士的素質が

あつたことは否まれぬ。然も一方にその教養上なし得て來た閑雅な性と、生得の聰明とは確かに貴公子たる彼の人格に於ける著しい特色をなしてゐた。而してかかる性格を以て平生たえず外戚の壓迫に苦んで、その雄心を以ても明智を以ても如何ともなし得ず、不安不平のうちに自ら沈痛憂鬱の性を養ひ、眞個悲劇の主人公たる性格をなし得たともいふべきで、まさしく平安文雅の時代から鎌倉の本期にいたる過渡時代といふ特殊の時勢が生んだ黑い花であつた。』（佐佐木信綱氏。畫題としての源實朝。文と筆收）　○『終始血を以て汚され鎌倉の歷史中淸くして美なるは唯僅かに彼治世の頁のみ』（鶴陰居士。源實朝）。　○『このおとどは大方心ばへうるはしく、たけくもやさしくもよろづめやすければ、ことわりにも過ぎて、もののふのなびきしたがふさまも、ちゝ（代々）にもこえたり』（增鏡新島もり）。　○『右大臣實朝略評。實朝は十二歲にして將軍家の跡を續しむ。其性智慮ありといへども、物に依て昧ますに安し。然れども政道の是非行狀の得失頗る二代將軍に超過せるか。

……然れども實朝成長に從ひ、文藝柔和に流れて甚倭歌を好めり。偏に詞花言葉に泥み、文武共に廢れたるが如し。惜哉。……愚按ずるに、實朝は右大將の爲めには不孝惡逆の子なるべし。其故いかなれば、源氏中興の家督を得て賴朝の大功を思はゞ、只今死するまでも身を全うして世を保つべきものなり。何ぞや自弃自暴にして、高位高官を辭せず、其身を恣にして渡宋せんと企つ云々』（大坪無射東鑑集要）。　○『又ヲロカニ用心ナクテ文ノ方アリケル實朝ハ又大臣ノ大將ケガシテケリ。亦跡モナクウセヌルナリケリ』（愚管抄卷之六）。　○『彼の生が素朴な外形に充實緊張せる生をひそめて內的化のそこひに湧き來る沈鬱の心もちは此の破格の音調によつて强く眞實に現はされて居るのである』（三井甲之氏人生と表現）　○『源家有力の家人は桐の一葉づゝ落つる如く相ついで殺された。詩人實朝は此の裡に人となつたのである。彼の歌に、よの中は鏡にうつる影なれや有にもあらずなきにもあらず。この悲痛なる人生觀は彼の周圍を見ねば解釋するを得ぬ』

（松本彦次郎氏人生と表現）。　○三浦周行氏は實朝の子なきを過淫の結果ではあるまいかと云つたが、荻生徂徠はなほ奇說をいつてゐる。いはく、『政子の淫亂の迹傳はらぬは廣元の諱みしなるべし。賴家・實朝・時政・義時・和田・秩父まても終をよくせざるは、しるせる外に子細あるべし。淫毒をあらざりしかば、かゝるいはれなき事はあらじ』（南留別志）。いかにも奇說である。　○『彼の性情は如何。慘忍殺伐なりし當時の武人の間にしては、優柔とも見えけむ。しかも聰明にして治道に志あつく、仁義の念明らかに、寬宏の度量に富み、風姿閑雅宛然貴公子の風ありしもの、これ彼が爲人なりしならむ（中略）かくの如き傾向の人が、一方に寧ろ意志の剛健に於いて缺くる所あるは自然のことなり。彼は意志薄弱にはあらざりけんも、決してその紛亂の世に處してその境遇に打勝ち、その所志を斷行する如き人にはあらざりけむ。然りといへどもこの點に於いては吾人はまた彼が未だ若年なりしことについて充分酌量する所なかるべからず』（佐佐木信綱氏、金槐集の後に、）

○

陳和卿は實朝と關係あるがゆゑに、その人物に就いて、先輩の文に據つて少しく書く。予は「東鑑」の文章のほか、大森金五郎氏（陳和卿の事蹟。國學院雜誌第七卷第一號二號）と、三浦周行氏（鎌倉時代史）との文に依つて、陳和卿の事蹟を略知り得た。陳和卿の本邦に渡來したのは何時ごろであるか明かではないが、「玉海」の壽永元年七月廿四日の條に書いてある、『宋朝鑄師年來渡=此朝=』の『宋朝鑄師』は和卿であるらしいから、壽永元年以前に渡來してゐたものらしい。そして、「東大寺造立供養記」には『鑄物師大工陳和卿也。都宋朝工舍弟陳佛壽等七人也』とあるから、和卿は六人の助手を連れて來てゐたのである。壽永二年四月十九日に重源上人が後白河法皇の旨を奉じ造東大寺大勸進として專ら經營の任に當り、和卿をして大佛の頭を鑄造せしめたが、五月二十五日に成就した。その間冶鑄十四度に及んだといふことである。そして、文治元年法皇親しく臨御になつて開眼の式を行

はせられた。和卿はかういふ爲事には當時にあつては驚くべき修熟した手腕を以てゐ、又極めて大規模な爲懸(しかけ)でやつたのである。「東大寺造立供養記」にはかう書いてゐる。『和卿與二上人一作二火鑪三口一以置二佛上之東西一鑪口弘一丈高一丈餘也。涌レ銅時一萬餘斤或時七八千斤也。炭或六十石五十右(中略)錫湯入二鑪口一如二大河流一于江海一飛焰上二空中一似二猛火燒一于泰山一其聲如二雷電一聞者悉驚動云々。』

ついで、大佛殿の建立に著手し、文治二年には柱始を行ひ、建久元年十月には棟上の式を行ふやうになつた。この東大寺造營は朝廷も關係した爲事であるが、當時源平合戰の眞最中であつて人民貧し國費空乏の時であつたにも拘らず、周防・備前あたりを造營料所に寄せ重源をして大勸進となし、頼朝も鉅資を捐て、造營の料に充て、諸國の守護、家人などに至るまで盡力せしめたのである。東大寺の石造獅子の石材を宋から購入して、その運搬料三千餘石を支拂つたといふのを見ても、いかに思切つて造營に從事したかがわかる。

和卿の評判が非常によく吡首羯摩の再誕とまでいはれ、拜謁まで賜はらうとしたのを中山忠親の諫によつて中止になつたこともある。『東大寺大佛其功成。鑄師唐人今朝可レ飯二本國一云々。誠是權化之所爲。神明之結構也。彼唐人雖レ欲二召覽一異朝殊俗輙不レ可二入一禁裏一兼又廻却可レ謂二遺恨一(下略)』(貴嶺問答)によつてこれを知ることが出來る。和卿に金銀寶を賜はつたほかに、庄園をも賜はつた。庄園は記錄に據ると、伊賀山田郡の內、有丸・廣瀨・阿波・柚山の四庄と、播磨國大部屋及び周防國宮野庄と合せて六庄である。ところが、「東大寺要錄」、「長防風土記」などをみると、和卿は一旦賜はつたそれらの庄園を東大寺に寄進してゐる。建久六年三月東大寺の大佛供養には、頼朝は政子も頼家も連れて上京し、天皇の親臨に陪した。その時頼朝は和卿の手腕に感心して彼を引見しようとしたところが、彼は頼朝が多くの人を殺し罪業甚深の身だといつて面會しない。頼朝の贈つた金銀の馬をも斥けて、頼朝が奥羽征伐に著用したといふ甲冑と鞍とを受

けて、それを悉く寺に寄進し、甲冑は造營料の釘に、鞍は手搔會の十列の移轉に充てた。かういふ行爲を敢てした和卿が、建保四年六月に鎌倉に下り實朝に面會を求めた。實朝を一見すると三たび實朝を拜し、涕泣して、『貴客者昔爲宋朝育王山長老二于レ時吾列二門弟一』といつた。實朝は嘗てみた夢のことを思出して甚しく和卿を渴仰した。和卿は、實朝が前生に長老であつた育王山の蹟を觀察するために渡宋せんことを實朝にすゝめ、自ら案內者になりたいと云つた。實朝は義時らの諫言をも斥けて、六十餘人の隨行者を定め結城朝光を奉行として渡宋の準備をした。建保五年五月に唐船造畢によつて、數百の人夫を使役し和卿の訓說て諸人筋力を盡して、由比浦に浮べようとしたが、船底が砂上に膠著してどうしても浮ばない。午尅から申斜に至んでも駄目である。とうとう沙汰やみになつて、『彼船徒朽二損砂頭一』に終つた。陳和卿に關する記錄はここで絕えてゐる。

「玉海」、「東鑑」、「東大寺要錄」その他二三の書物によると、陳和卿は、大工としてのみならず、何となく非凡な人物のやうに見える。ところが「隨心院文書」は和卿の缺點を思ひ切つて曝露してゐる。その一節にはかう書いてある。『凡和卿作法嗔恚慢增盛之上、嫉妬狂氣相加之間、當寺居住之後、所行不當不レ可二稱計一哉。或大佛冶鑄時、妬二日本鑄師一其鑄形之中籠レ土入レ瓦、或佛殿造營之始、切破二數丈之大柱一忽造二私之唐船一、或造レ寺間、不レ用二上人之下知一、企二自由作事一之故、裳層垂木拔下、見者怪レ之、瓦葺之遲怠、職而由レ之、凡如レ此之所行不レ遑二毛擧一毎人知レ之、寺中無レ隱、然而依レ優二一德一不レ顧二萬過一已送二年月一畢』云々。大森金五郎氏は是等の文を見ない前は、和卿を其功にも誇らず無慾の境界に遊んだ高尙な人物のやうに思つてゐたが、是等の文を讀んで、『或は東大寺の僧侶等が陳和卿と庄園を爭ふ餘り、陳和卿の惡事を敷衍してあるかも知れぬが、陳和卿も兎に角淸廉の人とはいはれぬ。隨分貪慾なる人のやうてある』といつ

てゐる。三浦周行氏は、『前略此衒氣に滿てる突飛なる行爲（頼朝に對した行爲）は、人をして彼が異常の人物たりしやを思はしめん。然れども彼の性行に顧れば亦是れ一の傲慢なる、職人根性に過ぎざるのみ。彼は放縱にして怒り易く、且つ妬忌の情に富み、其技量に恃みて、狂暴を逞うし、或は大佛の鑄造に當りて我鑄工の鑄形に土瓦を投じ、或は寺院の造營に當りて、故らに其設計を誤り、重源を手古摺らしめしこと一再に止まらず。東大寺も初めは其特殊の技能に顧みて寛假し居たりしかど、建永元年彼が寺領を押妨するに及び、三綱は彼を院廳に訴へ、其下文を得てこれを停止せり。加之、寺家の木工も工事に熟達して復彼を要せざるに至りしより、彼は疇昔の如き優遇を受くること能はずして、頓に失意の境遇に陷れり。されば陳和卿は遠に東大寺に居堪らずなりしと見え、建保四年六月、人もあらんに頼朝の子にして彼が權化の再誕と稱する實朝の恩顔を拜せんがため自ら鎌倉に抵れり』（鎌倉時代史）といつてゐる。氏の說も「隨心院文書」（東大寺三

縛の解狀と同じものか）に據つたのである。予ひそかに思ふに、和卿に待つに高遠の人格を以てするのは不當ではあるまいか。寧ろ現代にして相當教育あり相當專門上技能あるものが、殖民地乃至貧弱な異國に渡つて一爲事をなさうとするともがらを聯想すべきである。異國に渡つて一爲事なさうとするものは何か一つ腕に覺えのあるものであるのを例とする。さういふものは自家意識がいたく亢進してゐて、從つて傲慢剛愎であり、王公將相の前にも驚かないのを例とする。それてゐて、その中に策を交ふることを知つてゐ、景氣よきに際しては金びらをまくことを知つてゐるのを例とする。一爲事をなさうとするの徒は大小の差別こそあれ野心家である。そしてときに際して苦策を露骨に出すやうになるのは自然の數である。本國土を離れて異境に生くるものは夜半に寂しさを覺える。待たるゝこと厚からざるに及んで苦策の益々露骨になるのはあはれむべきである。此卑近の聯想を以て陳和卿の事蹟を解明することは出來ないであらうか。和卿

は修熟した技能を我儘にふるふことは知つてゐた。しかし彼はつひに一刀一揮に永遠の性命を籠めようとする謙讓なる藝術家ではない。彼は實朝の面前に涕泣して育王山の長老を云々することは知つてゐた。しかしつひに神明をあふいで邊土に命を棄てん殉教の徒ではなかつたのである。日本を探り將軍を抱きこんで本國のためにしようなどといふ政治的色彩を以て彼を塗るのは寧ろ遠い遠いことである。予は彼の技能を感謝し、「隨心院文書」のいはゆる「一德」を敬して彼の我儘を顧みようとはしない。そして予は彼の末路に一向の同情をば寄せるのである。

實朝が渡宋の企については後世の史家もいろいろ推測してゐる。或は北條氏の壓迫を免れんためといひ、或は却つて北條氏を謀らんとしたのであるといふ管茶山の「筆のすさび」なども後說であつて、『果して其謀のごとく多勢を引き具して、舟に浮びて畿內中國にもあれ筑紫にもあれ旗あげし給はんに味方せざ

る人あらんや』とさへ云つてゐる。然し現今の史家の多くは斯ることはいはない。當時の佛說に動かされて一時の『精神的變調』を來したのである。すなはち、佐佐木信綱博士の、『吾人はむしろ彼が平生思を寄せし佛說に心動かされて、その堪へ難き平生の欝懷をやるの擧に出でんとせしものなりと解するの至當なるを思ふ』の穩當說を採るべきである。若し、單純に實朝のこの擧を目して、『佛に佞』したと說くに至つては、もつとも實朝に同情なきの說である。

○

實朝は承久元年正月廿七日、八幡宮拜賀の禮を行つた時、公曉のために殺された。この事は三浦博士が「鎌倉時代史」第二版一六九頁以下で、綜合的に說いてゐる。なほ雜誌「史海」第三十八卷で鶴陰居士が書いてゐる。以下の抄出は、前項のごとく予の覺え書として役立つのである。

○『入レ夜雪降積二尺餘。今日將軍家右大臣爲ニ拜賀一御ニ參鶴岳八幡宮一御社參

（中略）令レ入ニ宮寺樓門一給之時、右京兆俄有ニ心神御違例事一讓ニ御劒於仲章朝臣一退去給。於ニ神宮寺一御拜脫之後令レ歸ニ小野御亭一給。及ニ夜陰一神拜事終漸令ニ退出一給之處。當宮別當阿闍梨公曉窺ニ來石階之際一取レ劒奉レ侵ニ丞相一（東鑑）

○『內大臣實朝思ノゴトク右大臣ニナサレニケリ。サテ京ヘハノボラデ、コノ大將ノ拜賀ヲモ關東鎌倉ニイハイマイラセタルニ、大臣ノ拜賀又イミジクモテナシテ、建保七年正月廿八日甲午トゲントテ、京ヨリ公卿五人檳榔ノ車具シツヽクダリアツマリケリ。五人ハ（人名略ス）。ユヽシクモテナシツヽ拜賀トゲケル。夜ニ入テ奉幣終テ、寶前ノ石橋ヲ下リテ、扈從ノ公卿列立シタル前ヲ揖シテ、下襲尻引テ笏モチテユキケルヲ、法師ノケウサウトキント云物シタル馳カヽリテ、下ガサネノ尻ノ上ニノボリテ、カシラヲ一ノ刀ニハ切テタフレケレバ、頸ヲウチヲトシテ取テケリ。ヲイザマニ三四人ヲナジヤウナル者ノ出キテ、供ノ者ヲイチラメ、コノ仲章ガ前駈シテ火フリテ有ケルヲ、義時ゾト思テ同ジク切

フセテ殺シテウセヌ。義時ハ大刀ヲモチテカタハラニアリケルヲサヘ、中門ニトヾマレトテトヾメテケリ。大方用心セズサ云バカリナシ。皆クモノ子ヲチラスガ如クニ公卿モ何モニゲニケリ。カシコク光盛ハコレヘハコデ、鳥居ニマウケテ有ケレバ、ワガ毛車ニ乘テ歸リニケリ。皆散々ニチリテ鳥居ノ外ナル數萬ノ武士是ヲシラズ。此法師ハ賴家ガ子ヲ其八幡ノ別當ニナシテ置タリケルガ、日比思ヒモチテ、今日カヽル本意ヲ遂テケリ。一ノ刀ノ時、親ノ敵ハカクゾト云ケル公卿ドモアザヤカニ皆聞ケリ。……ヤガテ一人此實朝ガ頭ヲ持テリケルニヤ。大雪ニテ雪ノツモリタル中ニ、岡山ノ有ケルヲコエテ、義ムラガモトヘキケル道ニ人ヲヤリテ打テケリ。トミニウタレズシテ、切チラシ切チラシシテニゲテ義村ガ家ノハタ板ノモトマデキテ、ハタ板ヲコヘテイラントシケル所ニテ打トリテケリ。……實朝ガ頸ハ岡山ノ雪ノ中ヨリ求メ出タリケリ。同意シタル者共ヲバ皆ウチテケリ。……二月二日ノツトメテ京ヘ申テ聞ヘキ。院ハ水無瀨

殿ニヲハシマシケルニ、公經大納言ノガリ實氏ナドガフミ有ケレバ、參リテサハギマドイテ申シテケリ。』（愚管抄卷之六）

○承久元年　二月二日巳亥。未時關東飛脚到來。天下物忿也。右府將軍實朝公去月廿七日爲拜賀欲參八幡若宮之間。於社壇故賴家卿息若宮別當企謀叛云々。源文章博士仲章朝臣天命畢。都鄙騷動言語道斷。六日癸卯。大原祭如例。關東穢及洛事哉否事可有御卜之由有沙汰。然而仙洞丙穢也。不可及洛下之間被仰下云々。上皇自水無瀨殿還御。依關東事也。九日丙午新大納言（忠信卿）自關東入洛。是右府拜賀之時。爲扈從被下向也。左衞門督實氏卿。宰相中將國通卿。平三品光盛卿。刑部卿宗長卿已下。雲客濟々。各追々可被飯路云々』（百錬抄第十二）

○『時政は建保三年にかくれにしかば、義時ぞ跡を繼ぎける。故左衞門督（頼家）の子にて公曉といふ大とこ（大德）あり。親の討たれにしことをいかでかやすき心あらん。いかならむ時にかとのみ思ひわたるに、この内大臣（實朝）また右大臣にあがりて（建保六年十二月二日）大饗などめづらしく、あづまにておこなふ。京より尊者（忠信）をはじめ上達部殿上人おほくとぶらひいましけり。さて鎌倉にうつし奉れる八幡の御社にじんばいにまうづる。いといかめしきひびきなれば、國々の武士はさらにもいはず、都の人々も扈從しけり。立ちさわぎのゝしるもの、見る人もおほかるなかに、かの大とこ（公曉）うちまぎれて、女のまねをして白きうす衣ひきをり、おとどの車よりおるゝほどを、さしのぞくやうにぞ見えける。あやまたず首をうちおとしぬ。その程のどよみいみじさ思ひやりぬべし。かくいふは承久元年正月廿七日なり。そこらつどひ集れるものども、たゞあきれたるより外のことなし。京にもきこしめしおどろく。世の中火をけちたるさまなり。扈從に西園寺の宰相中將實氏も下り給ひき。さならぬ人々もなくなく袖をしぼりてぞ上りける』（增鏡）

○『前略實朝の暗殺者たる公曉と彼等との關係も頗る臭い。公曉は亦父頼家横死の怨を實朝に報いたものであるが、吾妻鏡を見ても、彼は幕府側より新將軍としての迎の使節を待ち詫びて自身から乘込まうとする途中をやられて居る。實際實朝が盛に放縱的生活を續けて居る間に、政子は京都へ上つて内密に宮將軍の擁立運動をやつて居たのである。此思慮の足らぬ若僧は恐らく義時一味の三浦義村に賣られたものではあるまいか。幕末の史家成島司直も嘗て吾妻鏡の文を按じて、實朝が後鳥羽上皇から御内書を賜つたことのいつか北條方に洩れて、「今先ゼズンバ制セラレントテ、公曉ノ弑逆ヲ計シニヤトゾ思ハルヽ」との論をなし、林述齋も此論旨面白しと賛成して居る。所謂後鳥羽上皇の御内書に同意を表しかねる我等も北條氏の親讓りの陰謀については其裏書をするのに躊躇するものではない』（三浦周行氏曾我兄弟と北條時政）

○『三月二日、變報京都に達せしかば、上下擧つて異常の驚愕に打たれ、武士競ひ起り、天下亂を思へり。是時後鳥羽上皇には水無瀬殿に御座あらせられしが、變を上つるに及びて還御遊ばされ、一面武士に旨を傳へて彼等の騒擾を鎮めしめ給ふと共に、他面には、五壇法、八壇法、仁王經法等種々の御修法を行うて朝家の安穩と天下の泰平とを祈らしめ給ひ、御所の開始後百箇日間寧靜を保たば賞を行はるべしとの御沙汰さへあり。鎌倉に於ても義時は亦同じく天下泰平の祈禱を修せり。此異常なる大事變後の形勢が東西を通じて鬼胎を懷かしめつゝありしこと、これを以て知るべきなり』（鎌倉時代史）

○

實朝の事蹟についてもなほ書くべきことがあるが、それは普通の歴史に讓つて、こゝには單に予の覺えのために箇條書にする。實朝の結婚に兼子の關聯してゐること。仲章に「孝經」を學んだ事。將門合戰繪をかゝせた事。前代の政蹟を見んと欲して頼朝自筆の文書を上らしめ圖書介清定を奉行として之を謄寫

せしめた事。聖德太子制定の十七條の憲法、守屋から沒收した公田の所在、天王寺重寶の記錄を知らうとして大江廣元これを調べた事。和漢武將の言行を仲章から講じてもらつた事。奥州十二年合戰圖を圖せしめた事、貞觀政要の講義を聽いたこと。建仁三年時政邸にて牧氏異圖の事。鴨長明入道と面會のこと。繪合・雙紙合會・蹴鞠・舟遊の事。長沼宗政强諫の事。地頭の爭を裁決し奉行を督して裁判に遺漏なからしめし事。將軍直訴許可のこと。莊嚴坊律師行勇の事。相模川橋梁修造のこと諸國の關津料に料田を充てた事。建曆二年加茂河堤修築の事。建保元年西國領地に於ける朝廷の臨時公事について應否議定の事。公經・師經右大將爭ひの事。實朝朝廷に對し恭順の事これは頼朝以來の遺風なること然かも幕府の體面保持の事。實朝の時の朝幕の關係は幕府の威力が頼朝の時ほど大くなかつた事。○實朝と朝廷との關係、特に後鳥羽上皇との關係についても兩說ある。承久記の、『三條白川の橋の邊に、最勝四天王院と名け、調伏の壇

を立て、咒詛し給ひしが將軍討たれ給うて後ち、白川の水の穢れんもおそろしとて、急ぎ壞ち捨てられけり。又將軍の御位たびたび除目に過分にすゝませ給ふことは、くわんうちにせんためとぞ仰せける』に據つて、實朝の官爵榮達、朝廷の對遇などを、所謂『官打說』『關東調伏說』で說明し、承久の亂の原因をもこのへんに歸してゐる。大森金五郎氏は此說を採つてゐる（謙倉時代史論）のに反し、鶴陰居士は、『太上天皇御書下預時歌』三首と、實朝の朝廷に對した恭順の態度京都公卿との交際、上皇が常に實朝を眷愛せられた事。權中納言忠信を遣して仙洞歌合の謄本を賜はつた事、その忠信（實朝の夫人の實兄）が承久の亂に京都軍一方の主將であつた事。元來咒詛は秘密であるべき筈なのにさうでない事。正治二年の京都で行つた五壇の御法をも鎌倉で誤解した例ある事などによつて精細に『官打說』『關東調伏說』を否定して居る（史海第三十八號）。三浦博士は實朝と承久亂の關聯を寧ろ否定し、『將軍としてこの實朝の行動は、政子・義時等の掣肘を受けたるも

のゝほか、概して自由意志の表示たりしは彼の性格境遇の當さに然るべきところ、これを他の誘惑指導に依るとなすは事實を去ること遠し。故に上皇が縱ひ幕府に對して如何なる企圖を有し給ひしにもせよ、彼の與り知るところにあらざりしは余の信じて疑はざるところなり』（鎌倉時代史）と云つてゐる。

○ 實朝の歌に關する文献補遺

田中常憲……『金槐和歌集註釋』（明治四十年）
鶴陰居士……『源實朝』（史海第三十五―三十八。明治廿八―廿九年）
葯房主人……『思ひ浮ぶ三つ四つ』（心の花五ノ九。明治三十五年）
武島羽衣……『國歌評釋』卷二。（明治三十五年）
宮脇義臣……『金槐集管見』（國歌第十六―十七。明治四十一年）
三井甲之……『歌話』（アカネ二ノ三。明治四十二年）

三井甲之……『源實朝の歌』（アカネ三ノ二―四。明治四十四年）
彌富濱雄……『實朝の矢なみつくろふの歌に就て』（國學院雜誌十八ノ十二。大正元年）
丸山正彦……『彌富君に答ふ』（同誌十九ノ一。大正二年）
緒方小太郎……『實朝の歌について』（同誌十九ノ二。大正二年）
松村英一……『金槐集の作者源實朝』（國民文學十一。大正四年）
佐佐木信綱……『畫題としての源實朝』（文と筆。大正四年）
橋田東聲……『短歌私鈔を讀みて』（詩歌七ノ五。大正五年）
土屋文明……『金槐集私鈔を讀む』（アララギ九ノ六。大正五年）
赤木桁平……『齋藤君の實朝觀に就て』（アララギ九ノ七。大正五年）
佐佐木信綱……『短歌私鈔をよみて』（アララギ九ノ八。大正五年）
尾山篤二郎……『短歌私鈔を讀む』（茂吉所藏。大正五年）

そのほか、實朝の經歷などに關しては、「東鑑」「愚管抄」「承久記」「增鏡」の類。「毎月抄」「百錬抄」の類。現代では三浦周行氏の、「鎌倉時代史」「歴史と人物。」大森金五郎氏の、「かまくら」「陳和卿の事蹟」（國學院雜誌。）そのほか「鎌倉文明

史論」「日本美術史講話」などを參照したが、それらは本文中に一々記して置いた。なほ實朝に關する史家の說で讀むべきものがなかなか多く存するらしいが予はいゝ加減で切りあげることにする。

良寛和歌集私鈔補遺

良寛和歌集私鈔補遺

○

良寛和歌集私鈔中に、良寛上人。良寛禪師と書いたところがある。此はほかの書にも例のあるところから、尊敬の意味で云つたのであるが、『良寛和尚』といふ方が、良寛に一番ふさはしい樣だから、さう改める。予の用ゐた禪師、上人、和尚などの尊稱は、良寛の場合は無論賜號諡號の意味で用ゐたのではない。

○

良寛の歌、（三一頁）の『さす竹の君がすゝむるうま酒をさらにやのまんそのだ

ち酒を』『露おきぬ山路は寒し立ち酒を食して歸らむ蓋しいかがあらむ』の『立ち酒』を解して、立ち乍ら飲む酒の事であらうと云つたが、これだけでは曖昧である。尾山篤二郎氏は、『立ち酒は人が旅立する時飲む酒なる旨誰かに聞けり恐らく越後地方の方言ならんか』と言越し呉れた。此は難有い注意である。『立ち酒』は『出立する際に飲む酒』である。多くは客が歸る際、その立ち際に飲む酒を、『立ち酒』と謂つてゐる。それから轉じて、もう充分頂いたが、それではもう一杯餘分に頂戴するといふときに、『それではお立にもう一杯頂く』といふやうになつてゐる。己の郷里では酒ばかりでなく食べものにもまた『お立ち』といふ事をいふ。房州には、『立ち酒』と同じ意味で、『わらぢ酒』といふ語がある。食べ立ち。頂き立ちなどの『立』も歸る、出掛けるの義である。

○

(頁一五五)『名譽といふ歌には行かない』は『名譽といふ訣には行かない』の誤。

(頁一七〇)『西行や寂然や芭蕉』は『西行や寂蓮や芭蕉』のつもり。(頁一九一)『さすたけは枕詞である』は『さすたけのは君へ掛る枕詞である』のつもりである。(頁一九七)『古人が歌つて逢坂』は『古人が歌つた逢坂』の誤。　○良寛作の長歌の句讀は、大體五七調に切る方がよい。

○

(頁一六〇)、良寛の歌、『國上の山を今をかも』は一本曰、『國上の山を今もかも。』(頁一七一)、集人會しては衆人會しての方が好い。(頁二五三)第十二行目の長歌の、『衾となして』の衾は、『ふすま』と訓む方がよい。(頁二四一)、第二行目の、『我が許に人の持て來ぬ』は『我が許に人は持て來ぬ』の誤。　○貞心尼を單に貞心といふべきところがある。前後の關係にて取捨せよ。　○(頁二六)、八行・九行の二首中の、『いざなへて』を『いざなひて』と直す。良寛の歌には間々假名ちがひがある。後人は其を訂正する方がよい。『いざなへて』は良寛全傳の倭歌並評釋に從つた

のであるが、「蓮の露」には、『いざなひて』になつて居る。○(三三頁)の評釋中、『二つとも貞心尼に與へた歌である』を、『後の歌(七七)は貞心に與へた歌である』と改める。前の歌(七七)は折に觸れての獨吟であらうか。○(一八四頁)の『杉の雫を聞き明かしつゝ』は、小林存氏の著書には、『松の雫を聞き明かしつゝ』となつてゐる。○(一八六頁)の黒坂山の歌は、作者が林間に住んでゐて、漏りくる月光を終夜見ようといふのである。第一の解わろし。黒坂山は西蒲原郡にある。○(一八一頁)『こゑきく時ぞ秋は悲しき』の歌を、猿丸太夫の作としたが、此は小倉百人一首や公任撰の三十六歌仙などに從つたのであるが、讀人不知とする方がよい。

○

(三六頁)の、良寛作長歌、『大雅堂畫贊』は、「遠野物語」所收の、遠野郷の獅子踊の歌に似てゐる。此は平瀨泣崖君から敎はつた。左に同君から拜借した「遠野物語」中から、その獅子踊の歌を抄出する。

めずすがり

一。仲だち入れろや仲入れろ。仲立なけれや庭すんげなえ
一。鹿の子は生れおりれや山廻る。我らもめぐる庭を廻るな
一。女鹿たづねていかんとして白山の御山かすみかかる
一。うるすやな風はかすみを吹き拂て今こそ女鹿あけてたちねる
一。何と女鹿はかくれてもひと村すゝきあけてたづねる
一。笹のこのはの女鹿子は何とかくてもおひき出さる

○

良寛が眞に萬葉ぶりの歌を詠むやうになつたのは、五合庵定住以後であるらしいといふことを「私鈔」中で言つて置いたが、實際良寛は五合庵在住中に萬葉集を耽讀したのである。そして、「萬葉集仙覺抄」に千蔭の「萬葉集略解」の解釋を書き込みながら讀んだのであつて、その「仙覺抄」も「略解」も友から

借りたのてある。その朱書のある「仙覺抄」二十卷は今尙ほ阿部家に現存してゐるさうてある。「仙覺抄」は寶永年中刊行のものであらうと思ふ。「略解」首卷の序は寛政三年に書かれてあるが「略解」の完成は寛政八年て、同年まづ卷一より卷五までを一帙として刊行し、文化九年までに全部三十卷を數回に刊行したのてある。千蔭は文化五年に七十四歳て歿したが、文化元年に（文化四年といふ説もある）將軍家に「略解」一部を献じて褒美として白銀十枚を賜はつた。文化元年は丁度良寛が五合庵に移住した年である。五合庵定住中「萬葉集」を讀んだことは良寛が定珍に贈つた書牘によつて明かてある。いま、西郡久吾氏と小林存氏の著書中より二三を鈔しようとおもふ。『此度は御疎遠に打過候。然れば與板より萬葉集略解參り候や。此者に（お）あつらひつかはさる可く候。もし未だ參らず候はゞ、御所持の萬葉拜借可被下候。下（丁）讀いたしおきたく候。與板へも早速人遣はし可被下候。以上。神な月十六日。良寛。定珍老』『萬葉書申（書

了）候間、大坂屋へ御返可被下候。　次の卷を借度候。之は（それは）此中の狀に委細申越候。何卒明日にも人遣度（致）被下候。朱墨も殘少々に（少く）なり候間、一丁たまはるべく（候）。げたの緒も、並に筆一本。草々（あら）かしこ。十月二十九日。良寛。定珍老』　『與板への書狀は、十月（日）の日づけに致し候間、十日より天氣次第に人つかはされ可被下候。大ぶろしき一枚。小ふろしき一枚もたせて。（イには一枚の二字無）荷物少々のこしおき候間、萬葉を（貫米を）國上へ被遣の（候）節、つかはし可被下候。並に朱唐紙・朱墨・筆御忘くださるまじく候。もし萬葉略解を御覽じ被遊候はゞ、二三冊あとへ殘し可被遊候。御取（お見）しまい被成候て（はゞ）早速持たせ可被遣候萬葉の二三四五所持仕候。良寛。』

西郡氏のと小林氏のとの間に相違のあること如是てある。括弧内のは小林氏著書所收のものてある。想ふに良寛書牘中の文字が讀にくいために、推讀の際に斯る相違を生じたものてあらう。これだけの資料て予は良寛が萬葉集を勉强し

た有樣を次のやうに推する。書牘中の、『與板』『大坂屋』とあるのは、與板の大坂屋三輪氏を指すのであつて、當時三輪氏は江戸版の「萬葉集略解」の數冊を買つて所持してゐたに相違ない。それを良寛が定珍を介して借りたのである。そして定珍と代る代るに讀んだものと見える。それ以前定珍がすでに「仙覺抄」を所持してゐて、それを良寛が借りて讀んだ事がある。「仙覺抄」だけでは物足りないといふので「略解」を參考し、定珍の依頼によつて、「仙覺抄」に朱書したもののやうである。尺牘中に「萬葉」とあるのは、「萬葉集仙覺抄」を指すのである。良寛は僻遠の地にあり、貧しい參考書に據つて萬葉を讀んだ。そして訓詁釋義に道草を喰はず、易々として萬葉の歌の本質に飛び込んでゐる。それゆゑ良寛を論ずるに際して、所謂萬葉學の見識などを云々してはならぬ。若し良寛の萬葉觀について論ずべきことあらば藝術としての萬葉の歌の本質に就いていふべきである。良寛の歌には語格の誤が間々ある。良寛は語法などは一と

ぼり覺え書に書き留めて置いて、あとは强ひて氣にも留めなかつたらしい。鈴木文臺の奥書ある、良寛自筆の文法覺え書を見ると、極めて簡單實用的な下婢の買物覺帳のやうなものである。そこで良寛の歌を味ふ際には語格などを顧慮してその歌を輕蔑してはならない。良寛は又「古事記」をも讀んでゐる。定珍宛の尺牘中に、『何卒古辭記御恩借致度候』。中村權右衞門宛の尺牘中に、『古事記を二十日ばかりお拜借被下度候』などとある。良寛は、藤原光枝（羽柴行藏、又大杉彦太郎と稱す。京都の人、後江戸に移り、三分坂法安寺側に住み、和歌を善くす。文化十三年四月十六日歿。年六十三）に歌を見て貰つた事のあるほか、「略解」を通して所謂古學派の言説を窺つたが、當時の有力な歌人とはちつとも交通しては居なかつたのである。それゆゑ、京都江戸あたりの歌壇の人々とは殆ど交渉が無いと謂つてよい。良寛の歌は最初は平凡な周圍の人々の歌と交渉して、歌らしい歌を作つてゐるが、晩年の作の多くは、歌壇の流派などの癖

と無關係に、全く自己に卽した純眞な境に到つてゐる。たとひ假設であつても競爭者を高い處に置いて進むのも一つの道である。良寛は競爭者の目當てなどは少しも無かつたやうである。凡庸な予等にとつては、どうも羨しいのである。

次ぎに僅かばかり良寛の歌の一般論について增補する。實は言ひたい事は多いのであるが、それは他日に期する。以下の歌の例證は盡く、『良寛和歌集私鈔』に錄しなかつたものばかりである。

○

此は私鈔で既に云つた事であるが、良寛の歌には格好が甚だ似てゐて一二句ちがつてゐるのがある。それらの中には誤寫も勿論あらうが、良寛自身がさう書き殘したものに相違ない。良寛は自分の歌を一々書留めて置く事が尠なかつたであらうから、大抵は諳記に據り、その中には一二句ぐらゐは忘れてしまつて、前に類似の句のあつたのを知らずに書いたものもあるらしい。或は自分で

意識して推敲し、前に人に書いてやつた歌と格好が少しく違つて、後に第二の人に書いてやるか紙片に書き留めるかしたのもあるらしい。次の數首の如きはなかなか格好が似てゐる。

秋萩の散りのまがひにさを鹿の聲の限りをふりたてゝ鳴く
このゆふべねざめて聞けばさを鹿の聲の限りをふりたてゝ鳴く
さよふけて聞けば高根にさを鹿の聲の限りをふりたてゝ鳴く
ゆふ月夜ひとりとぼそに聞きぬれば時雨にさそふさを鹿の聲
ながき夜にねざめてきけば久方の時雨にさそふさを鹿の聲
この岡につま木こりてむ久方の時雨の雨の降らぬまぎれに
水や汲まむ薪や樵(こ)らむ菜や摘まむ秋の時雨の降らぬそのまに
柴やこらむ清水や汲まむ菜や摘まむ時雨の雨の降らぬあひだに

良寛の歌には、ほかの歌人が作ればすでに厭味に陷りさうなところを、良寛が作ると、何がなし好く響く。これどういふ訣かを予は考へなければならな

い。

墨染の我が衣手は濡れぬとも杉のかげ道ふみわけて見む

いざさらば我もやみなむ九まり十づゝ十を百と知りせば

いざさらば蓮の上にうちのらむ縱しや蛙と人はいふとも

久方のあまぎる雪と見るまでに降るは櫻の花にぞありける

朝つゆにきほひて咲ける蓮葉のちりにはしまぬ人の尊さ

かくばかりありけるものを世の中になに朝顏をもろしと思はむ

わたつみの青うなはらは久方の月のみわたるところなりけり

○

『しばの戸の冬のゆふべのさびしさを浮世の人にいかで語らむ』　『山かげの槇の板屋に音せねど雪のふる日は寒くこそあれ』　『ゆく秋のあはれを誰と語らましあかさ籠に入れかへるゆふぐれ』。かういふ、どちらかといへば西行あたりの歌に近いものもある。萬葉流にならない以前は西行の歌あたりも讀んで、

習つたかとも思ふ。良寛は摺鉢一つで味噌も摺り、顏も洗つたといふほど貧寒靜寂の生活をなしたことは無論だが、されればといつて全く孤獨で住んでゐたといふのではない。相等の同情者と交際する者とを有つてゐたのである。良寛の寒寂な歌を味ふにも此事を念中に持つ方がよい。歌心は必ずしも日常生活の斷片でないからである。

『白露はことにおかぬをいかなれば淡く濃く染む秋のもみぢば』これは弟の由之に與へた歌で、西郡氏は『禪師の禪や高遠幽玄なるかな』と評してゐる。なほ『み山べのみ雪とくれば谷川によどめる水はあらじとぞ思ふ。』といふ貞心尼に與へた歌のやうなものもある。予は禪は全く分からないが、是等の歌を好かない。この種類の歌の中では比較的よいものを此に拔いたのであるが、矢張りどこかに概念の理に墜ちて、迫つてくる甚深の氣に乏しいからである。詩禪は一味と謂ふが、兎に角詩としては上乘のものではない。かういふ種類の歌でも

つと低級なものが、良寛歌集には二十首餘もあらう。予は皆それを棄てるのである。然し良寛の歌全體から觀て、如是種類の歌は寧ろ少數である。これは他の禪僧の歌集などと趣を異にする點であることは、すでに「私鈔」で論じた如くである。又同じく良寛の歌を稱揚しても、かかる禪味歌の存するを以てて無いといふことをことわつて置きたいのである。

○

『おもかげの夢に見ゆるかとすればさながら人の世にこそありけれ』この歌の詞書に、『はらからのあざり身まかりしころにみなきて法もんのことをかたりて』とあり。兄の圓澄が三十一歳で寂したときの歌である。當時良寛は四十四歳で行脚先から歸國した時詠んだものである。また、西行の墓に詣でて、『たをりこし花の色香はうすくともあはれみたまへ心ばかりは』と詠み、法友が嵯峨の寺院に入らうとした時の詠に、『ことさらに深くな入りそ嵯峨の山たづねていなむ道の知れぬに』などがある。此等は、いまだ萬葉集を體得しない時の作でむしろ藤原光枝の歌風を傳へたものであらうとおもふ。殊更に俗氣は無いが、一寸何か深か相な『ことわり』を言はねば氣が濟まぬといふやうな所がある。

予は「私鈔」では斯る歌を皆棄てたが、良寛の歌の發達を見るのに興味があるから書いて置くのである。なほ次のやうな歌がある。

難波津のよしや世の中梅の花むかしを今にうつし見るかな
草枕夜ごとにかはる宿りにも結ぶは同じふるさとのゆめ
浦風も心して吹け千早振神の社にやどりせし夜は
浦波の寄する渚を見わたせば末は雲井につゞく海原
何故に家を出でしと折ふしは心に愧ぢよすみぞめの袖
わが袖は涙に朽ちぬ小夜ふけて浮世の中の事を思へば
世の中の憂さを思へばうつそみの我身の上の憂さはものかは
旅人にこれをきけとやほととぎす血に泣く涙かわかざりけり

なにごとも皆むかしとぞなりにける花に涙を濺ぐけふかな

見ても知れいづれ此の世は常ならぬおそくとく散る花の梢を

『都鳥隅田川原になれ住みてをちこち人に名や問はるらむ』　『ふるさとをはるばる出でて武藏野のくまなき月をひとり見るかな』の二首は。文化九年江戸雲水の際に詠んだものであらうと西郡氏が考へてゐる。文化九年は良寛五十六歳の時で、五合庵移住第九年目に當てゐる。五合庵で「萬葉集」を味讀したとすれば、或は良寛五十六歳以後に味讀したのであるかも知れない。なぜかといふに、此二首の歌は、ちつとも「萬葉集」の妙味が出てゐないからである。或は西郡氏の考證が間違つてゐるかとも思ふ。もつとも「萬葉集」を耽讀したからと云つて直ぐ萬葉調になれるものではない。漸々の移行型があるに相違ない。「私鈔」で說いた歌は惜いて、『我はもよいはひて居らむ平らけく小山田櫻見てかへりませ』は、良寛七十三歳の時、弟の由之に贈つた歌であるから、此歌や、

乙子祠畔に移つてからの、『乙宮の森の下庵訪ふ人はめづらしもよ森の下庵』や、『よもぎのみしげりあひぬるわが宿はたづぬる人も路まどふらし』などの歌調を晩年型と見れば、これに至る間の、五合庵在住中の歌がある筈である。予は次のやうな歌をさう思ふ。

心あらば草の庵にとまりませ苔の衣はいとせまくとも

山里のさびしさなくば特更に來ませる君に何をあへまし

君きませ雪はふるともあととめむ國上の山の杉の下みち

足引のわが住む山は近けれど心とほくも思ほゆるかな

足引の山たちかくす白雲は浮世を隔つ關にてこそあれ

瀧つ瀨の音きくばかり庵しめてうき白雲に世は送りてむ

いざここに我身は老いむ足引の國上の山の松の下庵

とふ人もなき山里に庵してひとりながむる月ぞくまなき

山すみのあはれを世にかたらまし稀にも人の來ても訪はねば

我やどは國上山もと戀しくば尋ねて來ませたどりたどりに

○

良寛の歌は一讀平凡のやうてあつても、讀み味ふと、心が自然に流露してゐて棄てがたいのがある。それらは多くは五十五六歳から以後の作に屬するものらしい。「私鈔」中に錄しなかつたもので棄てるのが惜しいものを、補遺として左に錄しようと思ふ。

(一) 春の野に若菜つめどもさす竹の君とつまねば籠に滿たなくに

(二) 久方の空よりわたる春の日はいかにのどけきものにぞありける

(三) 久方の雨の晴間に出でて見れば青み渡りぬ(霞み渡れる)四方の山山

(四) 梓弓春の山べに兒どもらと摘みしかたこを食べば奈何あらむ

(五) むらぎもの心は和ぎぬながき日にこれのみ園の林を見れば

(六) 山吹の花のさかりに我が來ればかじか鳴くなりこの川のべに

(七) 夏山を我が越えくれば杜鵑こぬれ立くき啼き羽ぶく見ゆ

(八) 秋もやゝ衣手さむくなりにけり草の庵をいざ閉してむ

(九) 秋のぬに匂ひて咲けるふじばかま折りて贈らむその人なしも

(一〇) 秋かぜを待てば苦しも川のせに打橋わたせその川のせに

(一一) 山里はうら寂しくぞなりにける木々の梢の散りゆく見れば

(一二) 秋さめの日に日に降るに足引の山田の老爺は遲稻苅らむ

(一三) 秋の雨の晴間に出でゝ子どもらと山路たどれば裳の裾ぬれぬ

(一四) わがいほは國上山もと冬ごもり往來の人の跡さへぞ無き

(一五) 音にきく檜曾の山べの紅葉見に今年は行かむ老の名殘に

(一六) わが庵は森の下庵いつとても淺茅のみこそ生ひしげりつゝ

(一七) 百鳥の木傳へて鳴くけふしもぞ更にや飲まむ一杯の酒

(一八) 我れも思ふ君もしか言ふこの庭に立てる槻の木ことふりにけり

(一九) 足引の國上の山の山はたに蒔きし大根をあかず食せ君

(二〇) 忘れては我が往む宿と思ふかな杉のあらしの斷えずし吹けば

(二一) いま二日三日も經ちなばさす竹の君がみ足もよく癒らまし

(二二) 醫師のいふも聽かずにか へらくの道は岩みち足の痛まむ

(二三) 歌やよまむ手毬やつかむ野にや出でむ心一つを定めかねつも

(二四) 秋の夜は長しといへどさす竹の君と語れば思ほえなくに

(二五) 足引の山のしひしば折り焚きて君と語らむやまとことのは

(二六) 重ねては兎あれ角あれこのたびは歸り玉はれもとの里べに

(二七) 今よりはつぎて逢はむと思へども別れといへばをしきものなり

(二八) 越のうみ沖つ波間をなづみつゝ摘みにし海苔しいつも忘れず

(二九) この海の野積の海の海苔を得ばわけて玉はれ今ならずとも

(三〇) 行く秋のあはれを誰に語らましあかさ籠に入れかへるゆふぐれ

『山畑に蒔きし大根をあさすをせ君』の結末を、『飽かず食せ君』とした。誤植に相違ないからである。海苔の歌のはじめのうち、『摘みにしのりのりしいつも忘れず』を、『摘みにし海苔しいつも忘れず』とした。『のり』の二字衍と思ふからである。その他、假字を漢字に直し、詞書を省略した。若し此等の歌の一首

について檢べようとするならば、直接、良寛の歌集に據らねばならぬ。

○

以上の、良寛に關する予の言は、その資料を、西郡氏・大宮氏・小林氏の著書から取つた。しかし能く檢べてみると、同一の歌でも、書物によつて違つてゐる。同一の書簡でも矢張り書物によつて違つてゐる。これでは實に困るのであるが現在の予には別に差當つてよい方法は無い。おもふに、良寛のものを蒐集する際に現在の良寛自筆ものに據つたのであらうが、その際の讀誤り、寫し誤り、印刷の際の校正の誤り、さういふものが本になつて、互に違つたものとなつて世に傳はつたに相違ない。若しさうとせば、良寛本人にとつても、良寛に興味を有つ人々にとつても遺憾とせねばならぬ。そこで、今後前掲の諸著書以外にもつと熱心に、必ずしも前述の著書に據らずに、直接良寛自筆のものから新たに歌なり書簡なりを輯するといふことも必要であるとおもふ。それには矢張

りこれを越後に居住する人々に待つのは極めて自然である。このごろ、良寛に言及する人が予のやうに他國人（越後人でないもの）の間にもあらはれて來てゐる。また良寛の歌を模倣するものも出來て來た。これは一面は良寛を有名にし一面は良寛を平凡化する所以である。しかし縱ひ幾ばく良寛が一見平凡化されたやうに見えても、その本質は依然として同一であるべきこと、あだかも一時芭蕉が凡俗によつて偶像化されても、なほ依然として芭蕉の本質が同一であるがごとくである。予の生が眞に生きようと希求して、歩みの遲きに寂しさを痛感するのを、咎めない方がよい。

愚庵和尚之歌補遺

愚庵和尚之歌補遺

○

『愚庵和尚の歌』中の誤を次に訂正する。そのうち、歌の訂正は、「愚庵遺稿」の正誤表に從つて爲した。

頁	行	誤	正
二六七	六	弘化元年生	安政元年生
二六八	十	喝を扁し	偈を扁し
二七二	八	辨の僧正	章辨僧正
二七三	九	甘露門等の	甘露門等を

二七四	四	夢のたちに
二七五	八	吉野の若杉
二七七	二	志賀の山
二七七	一三	明治三十年頃以降から
二七九	九	早瀬を
二八二	七	しやをしやを吁吁
二八三	七	蟋蟀鳴きて
二八四	一一	可ならざるなき人
二八六	五	父母を憶ふ
二八七	二	この世にありと
二八七	五	自恃庵
二八八	一	行かな梅の花見に
二八八	四	物部の
二八八	一〇	いさなとり

二八九	三	知己になつてゐた
一九三	五	文求堂書店
二七〇	一三	血寫經による
二七四	一一	切實であるのが
二七六	二	千引の石を

夢のたちに	夢のたちに
吉野の若杉	吉野若杉
志賀の山	志貴の山
明治三十年頃から	明治三十年頃から
早瀬を	早潮を
しやをしやを吁吁	しやをしやを吁吁
蟋蟀鳴きて	蟋蟀鳴きて
可ならざるなき人	可ならざるなき人
父母を憶ふ	父母を憶ふ
この世にありと	この世にありと
自恃庵	自恃庵
行かな梅の花見に	行かな梅の花見に
物部の	物部の
いさなとり	いさなとり

知己になつてゐた	相識つて居た
文求堂書店	文求堂書店發行
血寫經による	血寫經による
切實であるのが	切實なものゝ
千引の石を	千引の石を

○

「愚庵和尚略傳」中、『旅廻の寫眞屋となつて豆州から駿遠甲信に入り奥州に至る』と書いたが、「血寫經」に據ると、奥州に行つたことが書いてない。豆州から京都方面に行き、それからまた駿遠甲信に入つたやうに書いてある。予が、愚庵が奥州に入つたやうに書いたのは、陸羯南氏の、「愚庵遺稿跋」に據つたのであつて、『父母は老年であるから最早此世に居らぬかも知れんが、妹は何處ぞに居るだらうとて、東北諸地方の女郎屋などを廻つて寫眞を取つたとのことである』を據りどころとしたのである。此は恐らく嘘ではあるまい。

「愚庵遺稿」は五百頁を越えた書物であるのに、愚庵の生年月日が一ヶ處も書いてない。明治三十七年が數へ齡五十といふ事が分つてゐる。それから逆算して生年を安政元年とした。生れた月日を知りたいと思つて、丘林寺に問合せたが、そこは今は尼寺になつてゐる樣子で、愚庵に關する書類などは一つもなく、從つてその生年月日も不明だといふ返辭をもらつた。誰か篤志家が骨折つて、「愚庵年譜」を書いて呉れるなら添いと思ふ。予には資料をさがす手づると暇がないので、單に「愚庵遺稿」によつて、和歌に關する簡單な紹介の言を書いたに過ぎないのは、予自身にとつても物足りないのである。

索引

短歌索引

凡例

一、此の短歌索引は、「短歌私鈔」「續短歌私鈔」所載の、實朝、良寛、愚庵の短歌、旋頭歌のみに限局せしめた。

一、此の短歌索引には、第四・五句の索引と、第一・二句の索引の二種類ある。旋頭歌の場合は最初の二句と、終の二句を取つた。

一、此の索引は五十音順によつた。

一、此の索引中に、(實)とあるのは、實朝作。(良)とあるのは良寛作。(愚)とあるのは愚庵作のことである。(良旋)とあるのは、良寛作の旋頭歌といふ意味である。

一、頁數を示したうち、例へば『二〇五』とあるのは、「短歌私鈔」の第二〇五頁にあるといふ意味であつて、『補七〇』とあるのは、「續短歌私鈔」の第七〇頁にあるといふ意味である。

一、この索引中、第四・五句の索引には、異本に云、若しくは一本に云、の歌は載せてゐない。反之、第一・二句の索引には、それ等をも載せてある。

一、第四・五句の索引

ア

天の原より春は來にけり(實)……一
秋の夜いたく更けにけるかな(實)……三三
天の川原に月かたぶきぬ(實)……三四
霞たばしる那須のしの原(實)……四六・補二九
哀とぞ思ふ年の暮れぬる(實)……五八・補二五
秋のゆふべは露ぞおきける(實)……六四
秋風さむみ雁は來にけり(實)……六六・補一九
あかつき方になりやしぬらむ(實)……六八・一五一
あまの小船の網手かなしも(實)……七八
あなつれづれげ友なしにして(實)……九四
あはれなるかなや親の子を思ふ(實)……九六
あるにもあらずなきにもあらず(實)……一〇三
有りとて有りと頼むべき身か(實)……一〇五
明くる程なき夜半のねざめに(實)……一三六
有りし昔のよゝのふるごと(實)……一三六
遊ぶ春日は暮れずともよし(良)……一五六
あらはれいづる月のさやけさ(良)……一七三
秋はいろいろにもみぢけるかも(良)……一七四
あそぶ春日は暮れずともよし(良)……一九〇
雨間に出でて摘みし芹ぞも(良)……一九一

ありとはこゝに誰か知るらむ(良)……二一四
あすさへ散らばいかにとかせむ(良)……二二一
あかし暮さむ麻手小衾(良)……二二五
朝な夕なに散りそめにけり(良)……二三六
歩きしことは今も忘れず(良)……二二六
遊ぶ春日は樂しきを經め(良)……二二七
赤裳の裾のぬれまくも惜し(良)……二三五
相見つるかも夢のたたちに(愚)……二七四
雨ふらぬまにつくれこの庵(愚)……二七五
あづまを立ちて明日か來まさむ(愚)……二八五
あさる雉子の朝な朝な啼く(實)……補七八
あをみわたりぬよもの山々(良)……補一三二
あさぢのみこそ生ひしげりつゝ(良)……補一三三
あかさ籠に入れかへるゆふぐれ(良)……補一三四

イ

池の藤波うつろひにけり(實)……二一
妹こひしらに身にぞ染みける(實)……三一
いちしの浦に千鳥なくなり(實)……四五
いとど都や遠ざかりなむ(實)……六九
いづのお山とうべも云ひけり(實)……八四
いまぞ榮えむ鎌倉の里(實)……補七七
いたくな吹きそ來ませる君に(良)……一八三
いかにのどけきものにぞありける(良)……補一三二
いくたび我はまゐりけらしも(良)……一八七
いささか殘すみづくきの跡(良)……一九九
いたらせ給へ天津かみろぎ(良)……二〇一
いよいよゆけばいよゝ消にけり(良)……二〇六

いまは相見て何か思はむ(良)……二〇七
い往き還らひ松はこぶ見ゆ(良)……二一一
い安く寢よはや明日にせむ(良)……三一〇
いくたびかきくうぐひすの聲(良)……二三〇
いや戀ひまされ亡き人のあと(愚)……二三四
いこまの山の頂も見ゆ(愚)……二七七
いそげ舟人おほろかにすな(愚)……二七九
祈れもろもろ摩訶般若波羅密(愚)……二八七
池のべ去らず見つゝ暮しつ(愚)……二九一

ウ

うれ葉かくれて刈る人ぞなき(實)……二三
うつろふ秋の花の上の露(實)……六七
うつろふ花の嵐たつみむ(實)……一五

うつの山風ふきもつたへよ(實)……一三五
うらさびしくもなりにけるかも(良)……一七七
うまれぬ先に腸に染みしを(良)……二二八
梅の花見て暮しつるかも(良)……二二九
梅のさかりは常ならなくに(良)……二七九
うづまく瀨をも漕き渡り見つ(良)……二二九
うつろふ秋は時雨ふりけり(實)……補七七
うち橋わたせその川の瀨に(良)……補一三三

エ

枝もとをに雪ぞつもれる(實)……五二
江崎の子らが來てぞつくれる(愚)……二七六

オ

おほあらき野の笹の上の露(實)……三六

音こそ立てね年を經にけり(實)……六〇・補二五
音き〻しより我や忘る〻(實)……六八
沖の小島に波の寄る見ゆ(實)……七二・補二〇
おもはず今に淺かりきとは(實)……七六
親もなき子の母を尋ぬる(實)……一〇〇
おもひしとけば夢にぞありける(實)……一〇五
おもひもいでむ心へだつな(實)……一三六
おほみうちはを我は持ちたり(實)……一九七
おし戴きぬ人のたまもの(良)……二一七
御すがた後の世まで遺らむ(良)……二一八
大峯つゞき道のかよへる(愚)……二八〇
音のかそけく聞えつるかも(愚)……二六〇
おのづからなる姿をぞ見る(愚)……二八一
親のみためと朝な朝な汲む(愚)……二八五
媼わがため今朝も炊ぎつ(愚)……二九〇
おもひみだれていとぞ寢れらね(實)……補七七

カ

片山陰に鶯の啼く(實)……二・補一〇
風にみだれて雪は降りつゝ(實)……八
かたみの浦に千鳥なくなり(實)……四五
かくろひゆけばまさる我が戀(實)……六六・一五一
かもといふ鳥浮寐すらしも(實)……七〇
賀茂の祭をねるは誰が子ぞ(實)……八三
かすかに我は住みわたるかも(良)……二〇三
風の木の葉にうづもれぬらむ(良)……二二五
かたりはてねば夜ぞふけにける(良)……二二六
かはづなくなり聲めづらしも(良)……二三一

春日の山も霞みてぞ見ゆ(愚)……二七七
苅藻の島の海人少女かも(愚)……二七九
かはづ聞きつゝ一夜寢にけり(愚)……二八〇
笠きて行かな梅の花見に(愚)……二八八
かみなび山に己がつまよぶ(實)……補二八
かじか鳴くなりこの川のべに(良)……補二三
かへり玉はれもとの里べに(良)……補二三四

キ

きこゆる空に月かたぶきぬ(實)……二三四
きよき月夜に雁なきわたる(實)……二三四
消えあへぬ程に氷しにけり(實)……四三
君に二心われあらめやも(實)……二九・二九六・補二六
來ませる君が心うれしき(良)……二六二
君が家路は遠からなくに(良)……二七二
きのふも今日も雪のふれれば(良)……二七八
きのふも今日も暮しつるかも(良)……二〇一
經はみ寺にかへるなりけり(良)……二二七
きけば昔の思ほゆらくに(良)……二三〇
君が暫しと立とまるべく(良旋)……二三三
君しまさねばさびしかりけり(良旋)……二三四
君しなければ樂しくもなし(良旋)……二三四
きのふ苦ふき今日雨のふる(愚)……二七六
君と二人し見らくしよけん(愚)……二八三
來鳴とよもす鶯鳥のこゑ(愚)……二八七
君とつまねば籠にみたなくに(良)……補二三
きぎの梢のちりゆく見れば(良)……補二三
君がみ足もよく癒らまし(良)……補二三

君と語ればおもほえなくに(良)……補二三四
君と語らむやまとことのは(良)……補二三四

ク

草のいほりに會ひし子らはも(良)……二二四
草のいほりをいざとざしてむ(良)……補二三
くゑはらゝかす雄たけびのよさ(愚)……二八二

ケ

けふの一日も暮れにけるかも(良)……二〇五
けふの一日もくれかゝるかな(良)……二〇五
けふ近江路をわれ越えにきと(良)……二〇九
けふをよき日と住ひそめつも(愚)……二七六
けふは十日となりにけらずや(愚)……二八四
けさの烟と立てゝ來らしも(愚)……二九〇

コ

このめもはるの雪ぞふりける(實)……四
この春雨に崩えいでにけり(實)……八・補二
この一枝をあはれと云はむ(實)……一七
こだかき山に秋風ぞふく(實)……三二
昔のいほりの雪のゆふぐれ(實)……五六
心は思ふとも足立たずして(實)……五九
心はわくとも人に云はめやも(實)……二五・補四五
この日暮らしつその山のべに(良)……一六〇
ここの高屋にのぼりて見れば(良)……一六五
ここのお庭に立たして見れば(良)……一六七
これのとぼそにたどり來にけり(良)……一六八

今宵の月に寢ねらるべしや(良) ……一七〇
ころもで寒しもみぢちりつゝ(良) ……一七五
小笹に雨のそゝぐをきけば(良) ……一七六
こゑきくときぞ冬は來にける(良) ……一八一
衣かたしき旅寢せる夜は(良) ……一八三
このごろ見ねばさびしかりけり(良) ……二二五
心やすきを思出にして(良) ……二二七
事なきときは音信もなし(良) ……二二九
こゑのはるけきこの夕べかも(良) ……二三一
こよひの月をとゞめてあらん(良旋) ……二三三
戀ひわたす子が櫂のしづくに(愚) ……二七三
心の奥に亡き人もあり(愚) ……二七四
ころもは濡れぬ松のしづくに(愚) ……二七八
こほろぎ啼きて寢心のよき(愚) ……二八三
苔むす下に我は棲まんぞ(愚) ……二八五
黄金ほしくば商人となれ(愚) ……二八二
この世にありと我が思はなくに(愚) ……二八七
こゑきく時は眠けくもあらず(愚) ……二八七
こゑのすめるは夏のふかきか(實) ……補七七
これのみ園の林を見れば(良) ……補二二
こぬれ立くき啼き羽ぶく見ゆ(良) ……補二三
ことしは行かむ老のなごりに(良) ……補二三
こゝろ一つをさだめかねつも(良) ……補二四

サ

咲けるあたりはしるくぞありける(實) ……六
咲くや川瀬の山吹の花(實) ……一三・補一七
寂しき杜に冬は來にけり(實) ……四〇

寒き霜夜を一人かも寢む(實) ……四九・補一八・二五
懺悔にまさる功德やはある(實) ……一〇三
さらにや飲まむそのたち酒を(良) ……二二
さてそののちは口を放たず(良) ……二七
さゞえの殼のふたにぞありける(良) ……二一九
坂を欲もてこぼたましものを(良) ……二三
佐渡の島根をうち見つるかな(良) ……二三二
さらさらとせし心こそよけれ(良旋) ……二三三
沙羅の木の花美しきかも(愚) ……二六九
さむるまをなみ夢さへ見えず(實) ……補七七
さまやきやうまた尊形となる(實) ……補七七
さらにや飲まむ一つきの酒(良) ……補二三

シ

知るも知らぬもなべて訪はなむ(實) ……八
下葉おしなみ露ぞこぼるる(實) ……二八
しづめる心人知るらめや(實) ……六一
しだひしだひに弱る悲しさ(實) ……二六
白雪ふりけりいつかしが上に(良) ……一五五
しばなくこゑをいづこに待たむ(良) ……一五八
しぐれの雨の間なくしふれば(良) ……一七七
しばを焚きつゝ夜を明かしてん(良) ……一八二
しきみ摘みつゝ今日もくらしつ(良) ……二〇一
しばしとて我が杖うつしけり(良) ……二二四
時雨の雨に濡れつゝ立てり(良) ……二二一
時雨の雨に濡れつゝ立てり(良旋) ……二三二
しやをしやを吁吁今しかも(愚) ……二八二

ス

杉の葉白く雪の降れゝば(實)……五六・補八
過ぎにし事は問はずともよし(實)……八二
薄尾花の露をわけわけ(良)……一六三
杉立つ宿にかへるさのみち(良)……一六九
杉の葉しぬぎ霰ふるなり(良)……一七九
杉のしづくを聞きあかしつゝ(良)……一八四
杉のあらしのたえずし吹けば(良)……補一三五
葦つみつゝ時を經にけり(良)……二二五
過ぎにし兒らは歸り來なくに(良旋)……二三四

セ

關の小河に氷しにけり(實)……四四・補一七・二五

ソ

空とぶ雁のこゑも悲しや(實)……二六
そのふしぶしに代々はこもれり(實)……一〇七
その豐酒に我れ醉ひにけり(良旋)……二三四
その夕べには散りにけるかも(愚)……二六九
その手をとれば夢はさめにき(愚)……二七三

タ

たそがれどきの空に鳴くなり(實)……二三
たそかれどきに秋風ぞふく(實)……二五
たかしの山に鹿ぞなくなる(實)……四〇
高間の山はみ雪ふるらし(實)……五二・二六四・補七
たまさかにだに心へだつな(實)……六八

旅とし思へばわびしかりけり(實)……六九
たきすさびたる蕨の藻しほ火(實)……九三・補三
たどりつゝ來し君がとぼそに(良)……一七七
國中に立てるひとつ松の木(良)……一八八
旅のいほりに果てし君はも(良)……一九八
たかきの跡に庵すわれは(愚)……二七五
たまみづかつぎ遊ぶよろしも(愚)……二九〇
たゞよふ船の行方しらずも(愚)……二九一
高根のみ雪ふりつもるらし(良)……二四三
たかまが原に千木たかくして(實)……補七七
たてる槻の木ことふりにけり(良)……補一三五
たづぬる人も道まどふらし(良)……補一三一

チ

散りのこる岸の山吹の花(實)……一九
散りのこるべき花もなきかな(實)……二〇・補一七
千年ふれども年おいずけり(實)……一〇七
散りにけるかも往く人なしに(良)……一六四
千鳥なくなり春にはなりぬ(良)……二二七
父母のために衆生のために(愚旋)……二七二
千引の石を庭石とせり(愚)……二七六
千鳥は啼かず時早みかも(愚)……二八四
竹生島根は猶ぞよろしき(愚旋)……二八八

ツ

月いでゝ見るになきがはかなさ(實)……二八
月さへあやなかたぶきにけり(實)……六六
使につけてたづぬばかりぞ(實)……一三五

杖にすがりてそこまでもくる(實)……一三六
露につれつゝ訪ひし君はも(良)……一六一
月なかぞらに澄みわたるかも(良)……三二六
月みる友もあらぬ山ずみ(良)……三八
つゆに作れど雨にさやらず(愚)……二七六
つくれる庵は住みよけんかも(愚)……二七六
月夜にみれば黄金みちたり(愚旋)……二八八
つまごひすらし鳴音かなしも(實)……補七八
つまに戀ひつゝ鳴音かなしも(實)……補七八
つみしかたこを食べは奈何あらむ(良)……補一三
つみにし海苔しいつも忘れず(良)……補一三四

テ

手くびにまけば音のさらさら(愚)……二八九
手ならす我に障りあらめやも(愚)……二八九

ト

とく訪ひてませ逢ひたきものを(良)……一九三
取る人はなしあはれ鉢の子(良)……二一六
十とをさめてまた始まるを(良)……三三〇
とばいふものゝお前ではなし(良)……三三八
鳥のむらがり遊ぶを見れば(良)……三三〇

ナ

なれてもうとき水の音かな(實)……七一
鳴く山かげのあきのゆふ風(實)……補三
無しとてもなき世をも經るかも(實)……一〇二
なり見てしがな花にあくやと(實)……補九

などか昔をいと忍ぶらむ(實)……一三六
啼くこゑきけば時は過ぎけり(良)……一五九
啼きて越ゆらむ山ほとゝぎす(良)……一六〇
啼くこゑきけば昔おもほゆ(良)……一六一
ながるゝ涙とゞめかねつも(良)……一九八
鳴くこゑきけば心は和ぎぬ(良)……二二九
無きは多くぞなりにけるかな(良)……二三一
鳴門うづ潮我は見に來し(愚)……二七八
鳴門の瀬戸の島嶋子島見ゆ(愚)……二七九
なつめば落ちし玉敷くがごと(愚)……二八五
汝もなどてかはやかはらざる(愚)……二八二
ならしの岡に朝霧たてり(愚旋)……二八八
ならしの砲の音にしあるらし(愚旋)……二八八
なほ父母ぞ戀しかりける(愚)……二九〇

ヌ

ぬでゆらぐもよ人來るらし(良)……二〇三

ネ

ねぶの散るまで聲のせざるは(良)……一六一
ねのみし泣かれて寢ねがてぬかも(愚)……二七四
ねぐらをいづる聲のさやけさ(愚)……二八三

ノ

軒端の梅の春の初花(實)……七
野べの霞もたなびきにけり(實)……九
野中の松よみきと語るな(實)……一〇八

ハ

花散る里のさみだれの頃(實)……二四・補二三
はやくも秋の立ちにけるかも(實)……三二
はやくも今日の暮れにけるかな(實)……七五
はやきは神のしるしなりけり(實)……八五・補二六
はかなき夢の世にこそありけれ(實)……一〇五
八大龍王雨やめたまへ(實)……一一〇・補三四
波姑射の山のかげとなりにき(實)……一一八・一五〇・補七
花のさかりになりにけるかも(良)……一五五
萩のさかりに逢ひにけるかも(良)……一六三
花もこのごろ咲きそめにけり(良)……一六八
はしなく御名を唱へこそすれ(良)……二二八
花のさかりに訪ひし君はも(良)……二三一
母の年より四年老いたり(愚)……二二〇
花のさかりを見れば悲しも(愚)……二六九
はしらに切りて作るこの庵(愚)……二七五

ヒ

檜原が峰に啼くほとゝぎす(實)……二五・補一一
ひとり山べを啼きて過ぐなり(實)……二六
ひとりや寢なむ夜の衣うすし(實)……三一
ひとりや寢なむ長きこの夜を(實)……三二
日の入るときの空にぞありけろ(實)……九五
ひまもる風を何いとひけむ(實)……一三五
ひとりやさびし明かしかねつも(良)……一七六
人な咎めそ香には染むとも(良)……二二六
一夜こゝにと云はゞいかゞあらむ(良)……二二九

ひとり寢る夜のいねられなくに(良)……二三一
ひむがし山を住みすてゝ來つ(愚)……二七五
人な摘みそね鏃の食むがに(愚)……二八六

フ

ふかき峰より鳴きていづなり(實)……二六
冬ふかき夜に霜ぞおきける(實)……四二
ふた國かけてなかにたゆたふ(實)……九一・補二六
伏見の里も荒れぬといふものを(實)……一〇五
ふりにし里に我は來にけり(實)……一〇七
伏見の里に我は來にけり(愚)……二七五

ホ

ほのかに人を見るよしもがな(實)……六四・補一八
穂に出て嫉き戀もするかな(實)……六八
ほのかに見ゆる山梨のはな(良)……二三〇

マ

籬が島に月かたぶきぬ(實)……三五
眞間の繼橋くちやしぬらむ(實)……一〇八
またその中に泡雪ぞふる(良)……二〇六
まきし大根をあかず食せ君(良)……補一三
まさ目に一目みしことあらず(良)……二二
待てど暮せど音信の無き(良)……二二八
貧しき人をおほはましもの(良旋)……二三五
松の火かげに照らしてぞ見る(愚)……二八一

宮路の人ぞまとゐせりける(實)……一〇
みなわに浮ぶ山吹の花(實)……一四
見てこそ行かめ秋萩の花(實)……三七
亂れてのみぞ露もおきける(實)……三八
み山がくれに鹿ぞなくなる(實)……四〇
みねのこがらしきりて吹きぬ(實)……四八・補一八
見ゆる小島に雪はふりつゝ(實)……五一・補七
道ゆきごろも濡れもこそすれ(實)……七四
三世の佛にたてまつらばや(良)……一五六
見つゝ來にけり君がいほりに(良)……一六七
道も輝るまでもみぢしにけり(良)……一七五
道は岩みち足の痛まむ(良)……補一三四
峯のもみぢは散りすぎにけり(良)……一七七
み山はさはに松の音しつ(良)……二〇九
みぎりしみみに咲きにけらしも(良)……二二五
見れども飽かぬ一つ松かも(良)……二二七
峯にも尾にもつもる白雪(良)……二二九
路ふみわけて君は來なくに(良旋)……二三三
み船の山の峰にとどろく(愚)……二八〇

ム

むかうの里に朝な朝な啼く(實)……二六
むかしの事も問はましものを(良)……一八九
撫養の水門に榜ぎはつる見ゆ(愚)……二七九

メ

めづらしもよ森のしたいほ(良)……補一五一
めぐみのすゑに會はざらめやも(愚)……二七一

モ

もとあらの小萩ちらまくも惜し(實)……三八
もとあらの萩の花の上の露(實)……六八
もとつ人には戀やわたらむ(實)……六八
もり來る月を夜もすがら見む(良)……一八六
もゝちの今宵を月も澄みたり(愚旋)……二八八

ヤ

山ほととぎす啼きて出づなり(實)……二六
山の蟬鳴きて秋は來にけり(實)……二六・補一三二・二四
やゝ寒しとや蟲のわぶらむ(實)……三〇
やのゝ神山いろづきにけり(實)……三六
山のゆふ霧たちにけかんも(實)……三九
山のとかげに鹿ぞなくなる(實)……四〇
山寂しかる冬は來にけり(實)……四一
山路ゆくらむ山人やたれ(實)……補九
やまとにいかで跡を垂れけむ(實)……八三
八十の千ふしは色もかはらず(實)……一〇七
山ほととぎすをちこちに啼く(良)……一六一
山路は栗のいがの多きに(良)……一七一
山田の苗のかくるゝまでに(良)……二〇〇
山田の苗のしをるゝ見れば(良)……二〇一
山田の蛙きくがたのしさ(良)……二三〇
やどりて行かな親おもふがに(愚)……二七一
山下かげは未だ暗きに(愚)……二八五
やへ雲がくれ雁ぞなくなる(實)……補七
やま田のをぢは遲稻かるらむ(良)……補二三

やま路たどれば裳の裾ぬれぬ(良)……補一三三

ユ

夕ゐる雲に春雨ぞふる(實)……一一
ゆくらむかたの夕ぐれの空(實)……一三・補一一
弓槻が嶽に雪ふりにけり(實)……五三・補一二
雪を吹きまく山おろしの風(實)……五四
ゆくへもなしといふもはかなし(實)……一〇三
ゆふべの雨ににほふたちばな(實)……一〇八
ゆきゝの人にあこがれにけり(良)……一九五
ゆきゝの人の跡さへぞなき(良)……補一三五

ヨ

よろこぶものあれば怨ぶるものあり(實)……一〇三
吉野の奥も住みうしといへり(實)……一〇四
よろづ代かけて波ぞよすなる(實)……一〇六
萬代ふべきかざしなりけり(實)……一〇六
夜な夜な霜やおきまさるらむ(實)……補七七
夜な夜な目をもさましつるかな(實)……補七八
よそに聞くよりあはれなりけり(良)……一六一
より觸らぬを他力とはいふ(良)……二二三
よどめる水はあらじとぞ思ふ(良)……二二八
よべの暑さに風ひきつ我は(愚)……二九〇
よなけて炊げ爵に障るかに(愚)……二九〇

ワ

我ぞもの思ふ行方知らねば(實)……六二
我はしか思ふ妹にし會はねば(實)……六八

我のみひとりねにや鳴きなむ(實)……七五・補二五
私あれや今朝いまだ來ぬ(實)……八〇
われて碎けてさけてちるかも(實)……八六
わが衣手に露ぞおきける(實)……一三五
忘るとだに云はましものを(實)……一三五
われゐひにけりそのうまさけに(良)……二一一
我ぞ來にけるそのかげみちを(良)……二一三
わが老らくの時にあたりて(良)……二三〇
わが眉の毛も白くなりにき(愚)……二四〇
わたし給はなすくひ給はな(愚旋)……二七二
われも住まま く思ほゆるかも(愚)……二八三
わかれといへばをしきものなり(良)……補一三四
わけて玉はれ今ならずとも(良)……補一三四
ゐなのみづうみ舟とむるまで(實)……補七七

ヲ

尾の上の宮の秋のはつ風(實)……三二
萩の葉そよぎ秋風ぞふく(實)……三八
をどり明かさむ老のなごりに(良)……一七〇
をちの里べに雪やふるらむ(良)……一八〇
をりて贈らむそのひとなしも(良)……補一三二
をさなき時に立ちかへり見つ(愚)……二七四

二　第一・二句の索引

ア

呼呼しやをしやを未だかも(愚)……二八二
秋風に靡く山路の(良)……一六七
秋風に夜のふけゆけば(實)……二四
秋風の吹きそめしより(愚)……二八三
秋風はいたくな吹きそ(實)……三八
秋風はやゝ肌さむく(實)……三二
秋のぬに草葉おしなみ(良)……二三六
秋のぬの千草おしなみ(良)……二三二
秋の日に光りかゞやく(良)……一六五
秋の日に光りかがやく(良)……一六七
秋の夜の月のひかりの(良)……一七七
秋の夜もやゝ肌さむく(良)……一七六
秋はいぬ風に木の葉は(實)……四〇
秋萩の咲くを遠みと(良)……一六一
秋もやゝうら寂しくぞ(良)……一七六
秋もやゝうら寂しくぞ(良)……二二六
秋やまに咲きたる花を(良)……一六八
秋山を我が越えくれば(良)……一七五
朝咲きて夕には散る(愚)……二六九
朝菜つむ賤が門田の(良)……二二七
朝ぼらけ荻のうへ吹く(實)……三八
あさもよし君が心の(良)……二二七

足引の片山かげの(良)……二二〇
足引の國上の山の(良)……一六一
足びきの國上の山の(良)……一七三
足びきの國上の山の(良)……二三一
足びきの國上の山を(良)……一六〇
足びきの國上の山を(良)……一六一
足びきの黒阪山の(良)……一八六
足びきの西の山べに(良)……二三三
足びきの山田のくろに(良)……一八一
足びきの山田の田居に(良)……一八一
足びきの山田の田居に(良)……二三一
足びきの山田のはらに(良)……二三一
足びきの山田の翁が(良)……二一一
足びきの山の紅葉は(良)……一七七
足びきの山べに住めば(良)……二〇一
あだし野の露と消ても(愚)……二八七
あづさ弓磯べに立てる(實)……九四
あづさ弓春になりなば(良)……一九二
あづさ弓春野に出て(良)……二三四
東路のさやの中山(實)……六九
淡路島三原松原(愚)……二〇八
相連れて旅かしつらむ(良)……一六一
逢坂の關のこなたに(良)……一九五
葵草かつらにかけて(實)……八三
近江の海竹生島には(愚)……二八八
曠庭野の晴れゆく空に(愚)……二八八
天の川みなわさかまき(實)……三二
天の原ふりさけ見れば(實)……三三

天の原ふりさけ見れば(實)……三四
天地にひとりの母を(愚)……二九〇
雨はれに裳の裾ぬれて(良)……二二九
新たまの年のうちより(良)……二〇八
あら玉の長き年月を(良)……二二五
あり明の月は入りぬる(實)……二六
ありそ海の上に朝ごと(良)……二〇六
泡雪のなかに立ちたる(良)……二〇六
青梧のみどりすずしみ(愚)……二八五
青丹よし奈良の都の(愚)……二七七
青山の木の間たちぐき(良)……一五九
あづま路の道の冬草(實)……補七七
あをによしならの山なる(實)……補七八
あづさ弓春の山べに(良)……補一三二
秋もやゝ衣手さむく(良)……補一三三
秋のぬに匂ひて咲ける(良)……補一三三
秋かぜをまてばくるしも(良)……補一三三
秋さめの日に日にふるに(良)……補一三三
秋の雨の晴間にいでて(良)……補一三三
秋の夜はながしといへど(良)……補一三四
足引の國上の山の(良)……補一三三
足引の山のしひしば(良)……補一三四

イ

いざうたへ我立ち舞はむ(良)……一七〇
いさぎよく年は代れり(愚)……二八二
いざさらば我は歸らむ(良)……二三〇
いさ共に山べに行かむ(良)……二三一

いさなとり近江の海は(愚)……二八八
誘ひて行かば行かめど(良)……二二五
いそのかみ古のたか橋(實)……六八
いついつと待にし人は(良)……二〇七
いづくにて世をば盡さむ(實)……一〇四
伊豆の國山のみなみに(實)……八五・補二六
いつもかく寂しき物か(實)……九二・補一三
いづみ川はゝその森に(實)……補七七
いとほしや見るに涙も(實)……一〇〇
古へに有りけむ人の(良)……一九七
古へを忍ぶとなしに(實)……一〇七
古へを忍ぶとなしに(實)……一〇八
命全く長く垂らさまく(愚)……二八六
岩ねふみいくへの峯を(實)……一三六
今よりは涼しくなりぬ(實)……補三
石室の田中の松を(良)……二三一
岩屋には千々の佛の(愚)……二八一
飯乞ふと里にも出でず(良)……一七七
飯乞ふと里にも出でず(良)……一七八
飯乞ふと我來て見れば(良)……二二五
飯乞ふと我來しかども(良)……二二五
飯乞ふと我來にけらし(良)……一六三
飯乞ふとわれこの宿に(良)……一六四
今來むとたのめし人は(實)……六・補一九
今二日三日もたちなば(良)……補一三三
今つくる三輪のはふりが(實)……八二
いまよりはつぎてあはむと(良)……補一三三
今よりは塵をも据ゑじ(良)……一九八

今よりは古里人の(良)……二三九
いめひとの伏水の里を(愚)……二七四
伊彌彦の杉のかげ道(良)……二一三
甍には黄金をふきし(愚)……二七五

ウ

うかうかと浮世を渡る(良)……二一九
浮ぐさのおふる水際に(良)……二一四
浮雲の身にしありせば(良)……一五八
浮雲の身にしありせば(良)……一五八
浮雲の身にしありせば(良)……一五九
鶯のこゑはかりして(愚)……二八五
うたかたの泡と此世を(愚)……二七四
打靡き春さりくれば(實)……二・補一〇
打日さす京のうちを(愚)……二四五
美しき沙羅の木の花(愚)……二六九
渦潮は早しかしこし(愚)……二七九
うたやよまむ手毬やつかむ(良)……補一三四
現身の現ごころの(良)……三二八
うつたへに思ふ許りは(實)……一三五
現とも夢とも知らぬ(實)……一〇三
埋火もやや親しくぞ(良)……一八〇
うま酒に肴もて來よ(良)……二一二
生れては死ぬ理を(愚)……二六九
梅の花いろはそれとも(實)……八
うらうらと照れる春日を(愚)……二九〇

オ

濃つ鳥浮べる見れば(愚)……二八三
おく山の岩垣沼に(實)……六一
音にきく檜曾の山べに(良)……補一三三
音にのみききし鳴門の(愚)……二七九
音羽山山おろし吹きて(實)……四四・補一七・二五
おと宮の宮の神杉(良)……二二四
乙宮の森の木下に(良)……二〇三
乙宮の森の下やの(良)……二二四
乙宮の森の下いほ(良)……補一三一
おなじくは老蘇の森の(愚)……二七一
おのがつまこひわびにけり(實)……補七八
おのづから哀とも見よ(實)……一九
自から寂しくもあるか(實)……五六
自から我をたづぬる(實)……一〇八
大海の磯もとどろに(實)……八六
大君の勅をかしこみ(實)……一〇五・補四五
大空は明け初めぬらし(愚)……二八三
大和田に鳥もあらなくに(愚)……二九一
思ひ出て夜はずからに(實)……一三六

カ

かがなへて作れる庵を(愚)……二七六
かかる折も有ける物を(實)……一三五
鈌きて食べ摘裂て喰べ(良)……二一七
かくれ沼の下はふ蘆の(實)……六一
かしましと面伏には(良)……二二五
霞たつ長き春日に(良)……二三九
霞たつ長き春日を(良)……二三九

かさねては兎あれ角あれ(良)……補一三四
霞立つ長き春日を(良)……二四五
風寒み夜のふけゆけば(實)……四五
風は清し月はさやけし(良)……一七〇
風を待ついまはた同じ(實)……六八
數ふれば我も老いたり(愚)……二七〇
堅庭を泡雪のごと(愚)……二八二
かち人の渡ればゆるぐ(實)……一〇八
勝野浦ゆ漕ぎ出で見れば(愚)……二八八
かつらぎや高間の櫻(實)……一一
かつらぎや山を木高み(實)……五八・補二五
鶯の鳥を我が美しみ(愚)……二九〇
川上の岩屋の奥の(愚)……二八一
川上の丹生の祝が(愚)……二八〇
かみつけの勢多の赤城の(實)……八三
かもめゐる荒磯のすさき(實)……六八・一五一
唐ごろも立ちても居ても(良)……一九九
雁なきて秋風さむく(實)……三一
かりなきて寒きあさけの(實)……三六
雁のゐる門田の稻葉(實)……三五

キ

消えかへり有かなきかに(實)……六七
雉子なく小松が下の(愚)……二八六
聞きてしも驚くべきに(實)……一〇三
紀の國の高野のおくの(良)……一八四
君がやど我宿わかつ(良)……二三五
君來むと聞きにし日より(愚)……二八四

君なくて寂しかりけり(良)……一九七
君や忘る道や隱るる(良)……二二八
經もあり佛もあれば(愚)……二七四

ク

國上やま岩の苔みち(良)……一八七
草の庵に足さしのべて(良)……二三〇
くさ枕旅にしあれば(實)……補七七
くさ枕たび寢しすれば(良)……二〇九
くさ枕たびにしあれば(實)……補七七
久米の子よ命惜しくば(愚)……二八二
くすり師のいふもきかずに(良)……補一三四
雲のゐる梢はるかに(實)……四〇
暮れかゝる夕の空を(實)……三二
くれなゐの千入のまふり(實)……九五
くれなゐの七のたからを(良)……二一七

ケ

今朝みれば山も霞みて(實)……一

コ

小鴉の塒に宿る(良)……二二八
漕ぐ舟を呼ぶはたが子ぞ(愚)……二七九
苔ふかき石間をつたふ(實)……六〇・補二五
心もよ言葉も遠く(良)……二一八
寡しあれば事しあるとて(良)……二二九
來ぬ人を必ず待つと(實)……六八・一五一
この暮のうら悲しきに(良)……一九八

この頃は戀しきものは(良)……二一九
こしの海の沖つ波間を(良)……補一三四
この海の野積の海の(良)……補一三四
この里に行きかふ人は(良)……二三三
この園の梅の盛と(良)……二三〇
この園の柳の下に(良)……二三七
このねぬる朝けの風に(實)……七
木の葉ちり秋も暮にし(實)……四一
この宮のみ坂に見れば(良)……一五五
この宮の宮のみ坂に(良)……一五五
この宮の森の木下に(良)……一五六
この宮の森の木下に(良)……一九〇
このゆふべ岩間の瀧津(良)……一八〇
この鬱の香をきく時は(愚)……二八七
この岡の秋萩すすき(良)……一五六
犀たて〻啼けや鶯(良)……二二九

サ

櫻ばな散らまくをしみ(實)……九
笹の葉に霰さやぎて(實)……四八・補一八
笹の葉のみ山もそよに(實)……四九・補一八・二五
さす竹の君がすすむる(良)……二一
さす竹の君がすすむる(良)……二一三
さす竹の君がみためと(良)……一九一
さす竹の君と相見て(良)……二〇八
五月山木高き峰の(實)……三三
さつきやみ神なび山の(實)……補七八
さつき闇おぼつかなきに(實)……二六

さつきやみさ夜ふけぬらし(實)……補八
里べには笛や太鼓の(良)……二〇九
さとみこがみ湯たでささの(實)……補七七
佐保川の名をなつかしみ(愚)……二八四
五月雨に水まさるらし(實)……二二
五月雨に水まさるらん(實)……二三
五月雨に夜の更け行けば(實)……二六
五月雨の雲のかかれる(實)……二五補一一
さよふけて岩間の瀧瀨(良)……二四三
さりともと思ふ物から(實)……一三六
さほ山のはゝそのもみぢ(實)……補七七
さ蕨のもえいづる春に(實)……九

シ

しかりとも默に堪へねば(良)……二三六
時雨の雨まなくしふれば(良)……二二五
しほがまの浦ふく風に(實)……三四
霜鴉なきこそ渡れ(愚)……二八三
珠數の緒の玉のあな玉(愚)……二八九
白雲の夕居る山の(愚)……二八五
白ゆきはいく重も積れ(良)……二三三
しろ妙の衣手さむし(良)……二二六

ス

須磨の浦に蜃のとませる(實)……六四・補一八
すみ染の我が衣手の(良)……二三三

タ

大日の種子よりいでて(實)……補七七
高砂の尾上の鐘の(良)……二〇五
たかまとの尾上のきぎす(良)……補七八
薪こりこの山かげに(良)……二三〇
たくつぬの白髭の浦ぞ(愚)……二八八
たそがれに物思ひ居れば(實)……三八
鶴のゐる長良のはまの(實)……一〇六
旅ごろも野山を越えて(良)……二〇五
旅を行きし跡の宿守(實)……八一
旅をゆく跡のやどもり(實)……八〇
塔をくみ堂をつくるも(實)……一〇三
玉くしげ箱根のみうみ(實)……九一・補二六
玉くしげ箱根の山の(實)……二六
たまさかに來ませる君を(良)……一八二
玉だれの小瓶にさせる(實)……一〇六
玉だれの小簾のひまもる(實)……三一
玉ぼこの道は遠くも(實)……六九
玉ぼこの道まどふまで(良)……一六四
玉藻かる井手の河風(實)……一四
玉藻かる井手の しがらみ(實)……一三・補一七
靈屋には魂はまさめど(愚)……二八七
足乳根の母のかたみと(良)……二三二
他力とは野中に立てし(良)……二二二

チ

ちちのみの父に似たりと(愚)……二四〇
散りのこる岸の山ぶき(實)……一七

ツ

月清みさ夜ふけゆけば(實)……四五
つきて見よひふみよいむな(良)……二二〇
月讀のひかりを待ちて(良)……一七一
月讀のひかりを待ちて(良)……一七二
月よめばすでに彌生に(良)……二三七
月をのみあはれと思ふに(實)……四〇
妻こふる鹿ぞなくなる(實)……三九
露おきぬ山路は寒し(良)……二一二

テ

手をとりて昔の友を(良)……二三一

ト

時つ風福良の浦ゆ(愚)……二七八
時によりすぐれば民の(實)……一〇・補二四
常磐木のときはかきはに(良)……二三四
とにかくにあな定めなの(實)……一〇三
とに角に有れば有りける(實)……一〇一
遠人雁の飛島(愚)……二七九
遠山は葛城の山(愚)……二七七

ナ

中々に老は呆れても(實)……一三六
ながめつつ思ふも悲しく(實)……一三・補一一
歎きわび世をそむくべき(實)……一〇四

撫子の花におきゐる(實)……六八
何をもて答へてよけむ(良)……二三六
なよ竹のちぢのさ枝の(實)……一〇七
たよ竹のななのもも代(實)……一〇七
＊なりもならずも二人寐なまし(實)……補一二七
＊なびきおきふしよしや世の中(實)……補一二七
＊なく初こゑを我のみぞきく(實)……補一二八
なつ山をわが越えくれば(良)……補一三二

ニ

にはたづみ蹴手小衾(愚)……二六九

ヌ

ぬば玉の妹がくろかみ(實)……四二
ぬば玉の夜はふけぬらし(實)……二四
ぬば玉のやみのくらきに(實)……補一七

ネ

ねもごろの物にもある哉(良)……二四一

ノ

法の塵にけがれぬ人は(良)……二三一

ハ

萩の花くれぐれまでも(實)……二六
萩の花咲くらむ秋を(良)……一六二
箱根路を我越えくれば(實)……七二・補二〇
鉢の子を我が忘るれど(良)……二一六

鉢の子をわが忘るれど(良)……二一六
花曇り春の日永を(愚)……二八七
濱べなる前の川瀬を(實)……七五
早潮をい行きはばかり(愚)……二七九
春風は吹けど吹かねど(實)……六
春雨にうちそぼちつゝつ(實)……七四・補九
春さめの降りし夕は(良)……二五一
春雨はいたくな降りそ(實)……七三
春されば木々の梢に(良)……二三四
春過ぎて幾日もあらねど(實)……二一
春の野に若菜つめども(良)……補一三二
春の野に若菜つみきて(良)……二三〇
春深みあらしもいたく(實)……二〇・補一七

ヒ

久かたのあま雲あへり(實)……五二・二九四・補七
久方のあま飛ぶ雲の(實)……六八
久方の空よりわたる(良)……補一三二
久方の雨の晴間に(良)……補一三二
久方の雨に濡れつつ(良)……一六一
久かたの雨は降るとも(愚)……二八七
ひさ方の雨も降らなむ(良)……二〇〇
ひさかたの雲の際涯を(良)……二〇一
ひさかたの時雨の雨の(良)……一七七
ひさかたの空とぶ雁の(實)……二六
ひとの子の遊ぶを見れば(良)……一九八
獨り見れど飽かぬ月夜を(愚)……二八三

ひむがしの國に 我をれば(實)……一八・二五〇
ひめ島の小松がくれに(實)……一〇四

フ

ふく風の涼しくもあるか(實)……二六・補一・二三・二四
冬ごもりそれとも見えず(實)……五六・補八
ふるさとへ行く人あらば(良)……二〇九
降る雪をいかに哀れと(實)……五九

ホ

ほととぎす聞けども飽ず(實)……二四・補三三
ほととぎす汝が啼く聲は(良)……一六〇
ほととぎすかならず待つと(實)……補七八
ほのぼのと虛空にみてる(實)……一〇三

マ

まきの戸をあさけの雲の(實)……五五
まきもくの檜原のあらし(實)……五三・補二
まさきくて在せ父母(愚)……二七一
またも來よしばの庵を(良)……一六三
松の葉の白きを見れば(實)……四
松の尾の松の間を(良)……二二六
待つ人は來ぬものゆゑに(實)……六八
まつ宵の更けゆくだにも(實)……六六
愛子われ巡り逢へりと(愚)……二七三
眞帆ひきて漕ぎくる舟に(良)……一七六

ミ

みさごゐる磯べに立てる(實)……五二
三十あまり二の相(愚)……二六二
三十あまり三の御山の(愚)……二六一
道遠し腰は二重に(實)……一三六
路のべに蓬つみつつ(良)……二一六
道のべの小野の夕ぎり(實)……三七
水たまる池の坡の(實)……八・補二一
みどりなる一つ若葉と(良)……一七四
みなと風いたくな吹きそ(實)……補七七
み佛に手向くる菊を(愚)……二八六
見まくほり我がする君は(愚)……二八四
みや柱ふとしくたてて(實)……補二七
都べに夢にもゆかむ(實)……一三五
都よりふきこむ風の(實)……一三五
三吉野の山に入りけむ(實)……補九
み山べのみ雪解くれば(良)……二二八
三吉野の吉野若杉(愚)……二一五
三吉野はかしこき山ぞ(愚)……二八〇

ム

むさし野の草葉の露の(良)……二〇八
むらぎもの心たのしも(良)……二三〇
むらぎもの心は和ぎぬ(良)……補二三

モ

物いはぬ四方のけだもの(實)……九六
物おもはぬ野べの草木の(實)……六四
武士の矢なみつくろふ(實)……四六・補二九

百あまり八の障を(愚)……二八九
百づたふいかにしてまし(良)……二二四
もゝ鳥の木づたへて啼く(良)……補一三三
ももなかのいささ群竹(良)……一九九
桃山の小松が下の(愚)……二七六
桃山の高城の跡の(愚)……二七六

や

八重椿咲きたる山を(愚)……二八七
山おろしいたくな吹きそ(良)……一八三
山かげのありその浪の(良)……二二七
山かげの岩根もりくる(良)……二〇四
山かげの岩間をつたふ(良)……一七〇
山かげの岩間をつたふ(良)……二〇三
山かげの草のいほりは(良)……一八二
山かげの木の下いほに(良)……二二六
山かげのまきの板やに(良)……二三三
山里はうらさびしくぞ(良)……補一三三
山笹にあられたばしる(良)……二二二
山しげみ木の下がくれ(實)……六九
山ちかく家居しをれば(實)……補七八
山たづのむかひの岡に(良)……二三三
山遠み雲井に雁の(實)……九五・補二五
山は裂け海はあせなむ(實)……一一九・二九八・補二六
山ぶきの花のさかりに(良)……補一三二
やらの崎月かげ寒し(實)……七〇
八百よろづよもの神達(實)……補七七

ゆ

ゆくさくさ見れ共あかず(良)……一八九
往くさ來るさ見れ共飽ず(良)……一八八
ゆひそめて馴したぶさの(實)……七六
ゆく秋のあはれをたれと(良)……補一三四
ゆふぎりに遠の里べは(良)……一六九
夕ぐれに國上の山を(良)……一七五
ゆふぐれて國上の山を(良)……二二七
ゆふぐれの岡の松の樹(良)……一八九
夕されば稍葉のなびく(實)……三六
夕されば霧たちくらし(實)……四〇
夕されば衣手さむし(實)……三二
夕されば しほ風さむし(實)……五一・補七
夕されば野路のかるかや(實)……三八
夕月夜さすや川瀬の(實)……七一
夢ならば繼ぎて見ましを(愚)……二七四
夢はしも奇しき物かも(愚)……二七四

よ

よしあしのなにの事は(良)……二二二
吉野川川瀬をきよみ(愚)……二八〇
吉野川水音たかく(愚)……二八〇
世になしと思へる親を(愚)……二七四
世の中にかしこき事も(實)……一〇三
世の中は鏡にうつる(實)……一〇三
世の中は常にもがもな(實)……九八
よもぎのみ茂りあひぬる(良)……補一三一

夜もすがら草のいほりに(良)……一七九
夜をさむみ河瀬にうかぶ(實)……四五
夜をさむみ獨り寢覺の(實)……一三五
世を棄てし我にはあれど(愚)……二九〇

リ

良寛僧が今朝の朝葉菜(良)……二一八

ワ

我いくそ見し世の事を(實)……一三六
わが庵に人の來るこそ(良)……二三八
わが庵の垣根にうゑし(良)……一六八
わが庵の苔のほそ道(愚)……二八五
我が庵は奇しき庵かも(愚)……二七六
我が庵は誰が來て作る(愚)……二七六
若草の孀もあらねば(愚)……二九〇
我こころいかにせよとか(實)……一五
我こころ雲の上まで(良)……二〇一
わが袖も濡れこそ增され(愚)……二七二
わが國に咲きみだれたる(良)……二二六
わがために江崎の子らが(愚)……二七六
わがために炊がば炊げ(愚)……二九〇
我宿の八重の紅梅(實)……八
わたつ海の中に向ひて(實)……八四
詫びぬれど我庵なれば(良)……二二七
我さへも心ともなし(良)……二〇一
わが宿のませのはゝそに(實)……補七七
わが庵は國上山もと(良)……補一五五

わが庵は森のした庵(良)……補一三五
われも思ふ君もしかいふ(良)……補一三三
わすれては我が住むやどと(良)……補一三五

ヲ

小篠はら夜半に露おく(實)……三〇
斧とりて急げ工人ら(愚)……二七五

ナのホ三首は第一二句索引中に入るべきもの。

事項索引

○

源實朝……
實朝の生れた時頼朝の年齢……一二六・補五
實朝の和歌を作つた徑路……一二八
實朝の歌の總說……補六四
實朝の初期の歌……補六六
實朝の中期の歌……補七一
實朝の晩期の歌……補七二
實朝の戀歌の技方……補七五
實朝の歌の佳作補遺……補七七
勅撰集に選ばれた實朝の歌數……一四八・補四九
「なぜ本歌を有つ歌が多いか」の說……二九・一三四・補五〇
「なぜ萬葉調の歌を作つたか」の說……一三二・補五二
實朝の歌に對する眞淵の評……一三三・一三八
正岡・佐佐木二氏の評……一三九・一四〇・一五〇・補八〇

伊藤左千夫氏の評……七三・補八一
窪田空穗氏の評……一四一
實朝時代の氣運……一三七・補八三
實朝の人格に關する諸家の說……補八五
實朝の事蹟列記……補一〇七
實朝と朝廷との關係……二九六・補一〇九
實朝の殺された時の有樣……補一〇一
實朝と陳和卿、陳和卿の事蹟……補九三
藤原定家と實朝との關係……二七・補五五
定家が實朝の歌を褒めたこと……一三一・一三七・補五六
毎月抄の說……補五六
新勅撰集の實朝の歌……補五九
新勅撰集と定家の態度……一四九・補六二
金槐集命名のおこり……一四八
金槐集の歌數……一三三・補九
金槐集について……補八二
實朝の歌に關する文獻……一三三・補一一〇

○

あま雲あへり……三三・二九四
「あられ」の歌引用……補三三
うちなびく……補一〇
うつくしよし……補三
おれおれ……八二
寒蟬……補一
かげとなりにき……一一八・補一
郭公鳥……補五
けけれ……九一・補二四

「心はわくとも」の說……一一五・補四五
さまやきやう……補七九
種子……補七八
菅原や伏見の里……一〇四・補一二
拾遺愚草中の「わく」用例……補四七
たち酒……補一一五
ちぎ……補七九
つくつくほうし……補一
つゆじも……三六・補一六
「八大龍王」の歌の說……一一一・補三四
鉢の子……二六
ほととぎす……補四
卷向……三五・補一〇
みゆたでささ……補七八
藻しほ……九二・補一三
「矢なみつくろふ」の解……四六・補二九
山の蟬……二六・補一

○

良寛「萬葉集」勉强の事……補一九
良寛と「仙覺抄・略解」……補一九
良寛の「萬葉集」に關する書牘……補二〇
良寛と文法……補三
良寛と古事記……補三
良寛と藤原光枝……補三
良寛の歌の系統……二六一・補一三
互に似た良寛の歌……補三五
理を歌つた良寛の歌……補一三

良寛の初期の歌……補二六
良寛の歌の發達徑路……補二九
良寛の歌佳作補遺……補三三
良寛略傳……二四八
良寛の祖先……二四八
良寛と交渉ある人々……二五一・二六一
出家の理由……二五四
「良寛全傳」收の良寛の歌數……二五六
良寛の歌を蒐輯せし人々……二五六
良寛の歌に對する伊藤左千夫氏の評……二五七
良寛時代の本邦歌壇……二六一
良寛逸事……二六三

○

愚庵の略傳……二六七
愚庵の生年月正誤……補二九

正誤　二五頁一〇行の（六十三頁）は（七十五頁）の誤

續短歌私鈔　終

大正六年四月廿五日印刷
大正六年四月廿八日發行

正價金六十五錢

著者　齋藤茂吉　東京市青山南町五丁目八十一番地
發行者　岩波茂雄　東京市神田區南神保町十六番地
印刷者　福山福太郎　東京市牛込區矢來町五十二番地
印刷所　福山印刷製本所

版權所有

發行所　東京市神田區南神保町十六番地　岩波書店
電話本局五四二〇番
振替東京二六二四〇番